

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究（B）（1）、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

8 中見 立夫氏

なかみ たてお 東京外国語大学・AA研究所・教授
日時：1998年6月29日
出席者：伊藤隆 勝村哲也 村瀬信一 梶田明宏 西川誠 桜井良樹 小宮一夫

伊藤 3時からなんですが、あと遅れて来られる方として可能性があるのは有馬君だけですし、有馬君はもしかしたら来ないかもしれないというので、顔触れが大体揃いましたので始めたいと思います。

この研究会ではいろいろな方から、ご自分の研究の過程でどういう史料と巡り合わせてきたかという、史料についての情報をいろいろお話いただいたり、史料を獲得するため、あるいは見るためにどんな努力をなされたのか、そういった経験のお話を伺うということで続けてきたわけです。きょうで確か8回目になると思いますが、きょうは中見さんにお話を伺いたいと思います。

中見さんは、中国とロシアにたいへん強い方でいらっしゃいます。また活動的でしょっちゅう……まあ、外大のあの研究所は、あまり言うと怒られますが、非常に自由で、お金も豊富でやりたい放題やっているという噂も聞きますし、その上に中見さんは非常にエネルギッシュにいろいろおやりで、研究会なども随分、精力的にこなしておられるようですので、きょうはきっと我々の目からうろこが落ちるようなお話を伺えるのではないかと楽しみにしております。

では最初に、時間をご自由に中見さんのご都合によりましてお話いただいて、途中でも、あるいは終わってからでも質問させていただくということで進行させていただきたいと思います。それでは、恐れ入りますが中見さん、よろしく願いいたします。

中見 はじめまして、中見でございます。きょうは有馬先生経由で何か話せということでございますが、まず冒頭に感謝を申し上げますのは、伊藤先生の『近代日本研究通信』というのがございまして、あれで実は有馬さんとも交際ができて、かつ一緒に黒木親慶文書のみならず、白系ロシア勢力の指導者で日本とも関係の深いセミョーノフの自伝を翻訳して出すということとなり、もう翻訳自体は終わっているんです。私のところで最終作業をしていないからまだ出てないんですけど（笑）。そういうことがございまして、伊藤先生の『近代日本研究通信』に加えていただいた結果でございます。私は所詮、日本史畑の人間ではないので、ある種の情報や何かに欠けている点がございますので、あれで私は多くの方と知り

合いになれましたし、また日本史の伊藤先生が主宰されたグループ、あるいは他の方の研究情報を知ることができて知識が広がり恩恵を受け、光栄に思います。

きょうは、逆にこちらから何か皆さま方にお役に立つような話をしろということで、何を話そうかと思ったんですが、あそこでこういう資料を見つけましたというようなことをゴチャゴチャ話し出すときりがなくなってくるんですね(笑)。いささか散漫な話になるかもしれません。

伊藤 散漫で結構でございます。

中見 それでは話の順序といたしまして、おそらく私を怪しげな人間だと皆さんは思っているかもしれませんが(笑)、私が一体どういう関心から結果的にせよあちこちで資料を漁ることになったかということをも、自己紹介を兼ねて申し上げたいと思います。

私の基本的な研究関心というのは、今回のこの研究会の趣旨に合うこととしてはいまのところ3つございまして、1つは日本人にとっての「満蒙問題」の展開を新たな角度で考察する。つまり、いままで日本政治外交史、あるいは軍事史の方からも満蒙問題に関する研究というものは多々あるわけですが、私はむしろもっとそれを満蒙の側、ないしは日本の反対側のほうから見ながら、かつ日本側の動向も視野に入れて、新たな脈絡の中で説明をしてみたい。それから、はたして満洲という民族名がなぜ地名になったか。そういう問題をも含めて日本の大陸進出という問題を幕末ぐらいから追い、日本側からの視角だけではなくて、もう少し広い立場から見てみたいという気持ちがございまして。いま「満蒙独立運動」に焦点をあて、1つの本にまとめようと思っているんです。それを主にロシア、中国、モンゴル側の史料、および日本側のを再検討しながらやろうというのが1つあります。

2番目が、これがもともとのテーマでございまして、1911年の辛亥革命のときにモンゴルが独立する。この意味というのは実は、いまの中国というのは清朝の民族関係、あるいは国家体制というものを基本的に継承したものなんです。ところが、唯一モンゴルだけは清朝の中から独立できた。かたやチベットはできていない。なぜモンゴルができたのかというような問題を東アジアの国際関係史の中で取り上げてみたいということでございまして。

3つ目はいささか蛇足なんですけど、私、東洋文庫のほうでは主に満洲の文献学というか清朝史の問題をやっておりまして、そういう文献や資料を調査する過程で、東洋史学というのは実は日本が作り出した独自の学問体系なんです。成立したのが大体、1894年から1905年にかけて。日清戦争から日露戦争のときに、那珂通世の提案によってできるんです。ところがその時代は、日本には漢学があり、西欧では東洋学があったとしても、東洋史というものは世界には存在しなかったわけです。ヨーロッパ的な歴史学というものが導入され、さらに日本の在来の漢学、そしてヨーロッパの東洋学を組み合わせることができたのが東洋史学という、まことにユニークな体系であったと思うんですが、実は東洋史学が、学問として発展していくときに実証史学の方法論を根本にしていますので、あちらこちらで史料収集を行い、それによってだんだん学問として確立していくというプロセスの研究。はっきりいって日本では国史は非常に盛んかもしれませんが、東洋史学では学説史とか学

界史というのはあまりやらないんです。しかし、ロシアなどを見ますと、バルトリドという有名な学者が、『ロシアおよびヨーロッパにおける東洋学の発展』という非常に素晴らしい本を書いている。だから、日本の独自の体系であった東洋史学というものの自体がどういう時代環境の中で成立し、その過程でどのように史料を集めながら学問領域として形成されていくか。時代背景の中でとらえながら、いずれ東洋史学史みたいなものを書いてみたいと思っています。

レジュメでは「Ⅱ 海外での史料調査の履歴」というふうに書いてありますが、ここではアメリカとイギリスとドイツでの経験は外しております。結局、私が本格的に勉強を始めたのは大学院に入ってからなんですが、そのときは外交史で細谷千博先生の門下だったんです。それで、もともとモンゴルのことに興味がありましたから、それをやろうと思ったんです。

それで、辛くもいままで勉強が続けられたというのは、実は 1910 年代のテーマを延々とやっているわけなんです。1910 年代に関しては、ロシアの外交文書というのは非常によく、極めて見事な形で出版されていることも関係しています。『帝国主義の時代における国際関係』という、おそらくいままでの外交文書の出版として、ロシアのポクロフスキーが編集した文書集ほど水準の高いものはない。日本の外交文書集なんていうのは、はるかにレヴェルが低いんです。そういうものが1つあって、それで大体 1900 年代から1917年までは極めてよく編集されている史料集があったこと。ただ、これは日本では非常にバラバラに各図書館で所蔵されていて、全部手に入れるのにたいへんな苦勞をしました。

それから、日本の外交文書の中に満蒙問題に関連する情報が多く含まれていたこと。この当時まだ、70 年代では中国は全然、開放もしておりません。モンゴルもちろん、外国人が行ったとしても勉強なんか一切させてくれないというような所なんです。やはり外交史を勉強する以上、原史料に基づきながらやってみたいと思いました。唯一このとき史料調査が可能だったのが台湾にあった中国外交文書。ただこの時点でも、アメリカ人は結構見てたんですけど、台湾で外交文書を日本人の学者で見られた方というのは、坂野正高先生ぐらいだった時代なんです。最初行くときは、そもそもどうやって行ったら見られるかというのも分からないというような時代です。ところが、ちょうど坂野先生にお会いして大体やり方が分かって、向こうに行ったら林明德、黄福慶という東大卒業組がいて助けてくれたんです。だから、日本人としては坂野先生以来でした。ほかにも、若干、政治的に問題のあるような方で台湾に行っていた方はいたんですが。

それで、その当時の雰囲気は、私は広い意味では東洋史なんですが、中国史の人たちに言ったら、「お前、よく台湾なんか史料を見に行けるな」と言うんです。要するに、「我々は大陸に行きなきゃしょうがないんだ」と。だから、「モンゴル史の人たちは気楽でいい。中国史の人間で台湾なんか行ったら、みんなから白い目で見られる」と、そんな時代だったんです。モンゴル史、満洲史の研究者は、台湾の故宫博物院にある満洲語の史料を随分研究に行っていたので、そういう関係もあって私は比較的行きやすかつ

たんです。

それが大体 1976 年頃からで、ついでオーストラリアに史料調査に行きました。オーストラリアは、ジョージ・アーネスト・モリソンという袁世凱の顧問をやっていた人の文書がちょうどオープンになったばかりで、たまたま豪日交流基金からお金をもらえたので 80 年と 84 年に調査に行きました。史料調査の報告書らしいものは、このモリソン文書に関しては東洋文庫の『書報』に書きました。それから、モンゴルに関しては1つ書いております。それからロシアに関しては書きましたが、中国やその方面はあまり積極的に書いておりません。

中国に最初に行ったのは 76 年で、81 年にも行きましたが、それは学会に出たり見学旅行みたいなものです。本格的に文書館で仕事を始めたのは 1984 年頃からで、ほぼ毎年行っております。

それから、85 年から2年間うちの研究所の……うちの研究所は勝手なことをやっているというお話でございましたが、そういうことはございません。最近は非常に厳しくて(笑)、ヒイヒイ言っております。政策研究大学院ほど豊かではございません。うちの研究所は、助手で入りますと2年間外国に放り出される海外研修制度があります。すごい名前で「助手投入」って、投げ入れるっていうんですよ。2年間どこでもいいからということで、そのかわりものすごく滞在費が少なかったんですが、それであちこち行きました。どうも放浪癖はそのときからあるんです(笑)。

そのとき主に仕事をしたのは、中国、モンゴル、それからロシア、ドイツ、フィンランドと行ったんです。なぜフィンランドに行ったかという、まだこの時代はソビエト時代なもので、よしんばソ連に入っても、図書館でコピーを撮るなんていうのはたいへんなことだったんです。文書館についてもこのとき一応交渉はしましたけれども、手続きを踏めばできるとはいっても、たとえば、外務省の文書館なんかは頭から殆ど無理だと言われたんです。このときは、ソビエト科学アカデミーの東洋学研究所の招待で行ったんですが、学者に会ったり、制限つきで本のコピーは撮れましたけれども、自由なことというのはできなかったんです。それで、はじめからそういう状況は分かっていたので、どうしても複写を撮りたい本をどこで撮ればいいのかという、フィンランドで可能だったんです。というのは、フィンランドはロシア帝国時代はロシアの自治領で、ヘルシンキ大学の図書館には、ロシアの出版物が全て納本されていたのです。

フィンランドへ行ったもう1つの理由は、フィンランドの初代の駐日公使ですが、グスタフ・ラムステッドという人物がおります。彼は有名なアルタイ学者であると同時にフィンランドの独立運動家で、日露戦争のときは日本の支援を行ったという人物なんです。専門はアルタイ言語学で、そのためモンゴル辺りを探検して古代トルコ語碑文なんかを発見して、フィンランドが独立してからは初代の日本公使となります。その個人文書、および彼の収集したモンゴル関係の資料を見るということでフィンランドに1ヵ月ぐらいいて、もっぱらヘルシンキ大学の図書館でロシア語の本を、ソ連に行ったら撮れないと思ったから手当たり次第

撮りまくったというのが事実なんです(笑)。

面白いのは、ラムステッドと日本統治下の朝鮮の独立運動家の交流の手紙なんていうのもあるんです。ラムステッドは日露戦争のときは日本を応援しますが、日本公使になって日本に来たら、むしろ朝鮮の姿にロシア帝国時代のフィンランドの姿を投影して見るのです。

そのあとソ連を回って、モンゴルに行きました。ソ連圏の諸国では89年以降の体制崩壊によって突然、民主化が始まったように思われますけど、その前から、大体86年ぐらいがターニングポイントで状況は変わりつつありました。私は実はモンゴル科学アカデミーに西側の人間で客員研究員として入った第1号です。大体この頃からモンゴル側もスタンスを変えてきて、その前でしたら、いわゆる語学の教師——日本語を教える先生か、モンゴル語を学ぶ留学生は行けるんです。それから、2、3週間の学者の訪問は許されていましたが、3ヵ月もなんていうのは駄目だったんです。それがこの当時から入れるようになって、それがいままでずっと続いている。そうこうするうちにロシアも崩壊してロシアの文書館が見られるようになって、大体94年頃から、かなり本格的にロシアの文書史料を調査するようになりました。大体こういうところが主だった史料調査歴でございます。

きょうは何をお話すると皆さま方にいちばん役立つかわかりませんので、多少散漫ですが、けれども気がついたことを少しお話して、もしご質問があったらと思います。

史料を見ることが非常に難しかった中国やモンゴルやロシアが、あるときから段階を追って容易に見られるようになってきたというのは、1つには時代の幸運というのがあったといえましょう。国際情勢が変化して、ロシアでも外国人が大幅に文書館の中にアクセスできるようになったのは80年代末で、これはモンゴルと大体同じ時期です。完全にオープンになったのは90年代に入って以降ということで、私はもっと早くロシアでの仕事を始めたのですが、中国やモンゴルのほうにかかりきりになったものですから、ロシアでの研究は少し遅れて開始いたしました。いわゆる社会主義体制崩壊の過程の中で、文書史料をオープンにするということが非常に強く叫ばれて、ちょうどそういう機運に遭遇できたのは幸運でした。そういうわけで今は我が世の春を楽しんでおりますけれども、しかし、その風向きがいつ変わるとも分からないということも同時に考えなければなりません。

実は結果的にこういう順番で行ったというのは、史料調査のノウハウを習得するためには良かったと私は考えています。といいますのは、まず最初に台湾からスタートするんですが、台湾での経験は、1つには中国でも応用が可能であったこと。これは、はっきり言いまして、私の対象とする時期は中国でいうと、清朝から民国はじめなんですけれども、その文書というのは、かなりの部分が手書きです。あの書き方に慣れるという点で、外交文書から最初に始めたというのは、それだけ楷書が多いし非常に良かったんです。いわゆる宮中文書のなかの軍機処文書なんかですと、解読するのがむずかしい。スタートとして外交文書から始めて、文書の書式というものに慣れていくというプロセスを踏めたというのはよ

かったと思います。

それからもう1つ、中国でも台湾でも所詮同じ中国です。これから先は分かりません。つまり、台湾の台湾化というのが起こってますので。ただ、文書館のある種の雰囲気なり、あまり見せたくないときの交渉のやり方なんていうのは、これは所詮、同質の文化だったので、台湾の経験が殆ど大陸でも応用できました。かたや台湾は国民党の独裁政権で、中国は共産党。まあ、台湾は完全に民主化したと思いますけれども、過去においては、イデオロギーこそ違え、強権独裁体制というのは似たようなもので、ある種の中国的雰囲気に慣れるというのにはよかったです。

中国の経験はモンゴルでも応用可といいますのは、これは皆さんにはあまり興味のないお話かもしれませんが、いわゆる清朝時代のモンゴルの文書の形式というのは独特なもので、これははっきりいいまして、もともと中国の明代の文書形式が清朝ができることによって満洲語の世界に入るんです。それが満洲語を媒介にして今度はモンゴル語の世界に入ってくる。だから、清朝のモンゴル文書の形式というのは、あれは単にモンゴル語ができてよく意味が分からないんです。中国語のいわゆる公文書、要するに、ズーダーダーと書いていて、何々の「等語」とやってまとめて、1つ手紙を受け取るとそれに対してコメントを付けて、またそれに書いていくという、一種独特の形式があるんです。あれは少なくとも中国文書学の経験がないと、普通にモンゴル語が分かったところで分からないんです。これは大体もとの文書の、要するに、マニュアルの問題なんです。ちなみにモンゴルに関していいますと、それが21年の革命以降、今度は文書の文章語というのがまた変わります。つまり、ロシアの文書の様式に変わって、それによってモンゴル語の文章語も変わっていくという構造なんです。ですから、中国の文書館で読んだ文書の形式がモンゴル語の文書を読むのにも応用できたということだったんです。

それからさらに、今度はモンゴルのあとロシアに行くんですが、中国大陸およびモンゴルにおける文書管理というのは、もともとロシアの文書館の方式が入っております。ですから、整理の区分や目録の立て方、それからやり方なんかは殆どロシア・マニュアルなんです。そういう意味ではやはり、ソビエト体制下における文書管理が、新中国ができて中国に入り、モンゴルが独立して以降はモンゴルに入っていた。そういうアーカイヴの学問では、ソビエト・システムというのは少なくとも世界の半分を支配していて、そういうものにロシアへ行く前に慣れていたという意味で、結果的にこの順番は、経験を積むという意味では良かったのではないかと考えております。

最近イギリスへ行く機会が多くて、イヤン・ニシュ先生に「お前は大陸浪人か」と、いつもからかわれているんです(笑)。おそらく皆さんも変わった人だと思っておられるんでしょうけど。なぜそうあちこちで史料調査をやるかといいますと、私の問題関心は冒頭でお話した通りなんですが、満蒙問題ないしはモンゴル問題を追うと、常に日本というものがそこには登場する。しかも私は文書館に行ったら、どうも時間をロスするのが多いのは、いま目先

の史料を追うばかりか、せつかく来たんだから一応、全体がどうなっているか調べてみようとか、それから先々のことを考えると、もっと利用できるものがないかというので、ノートを作ったりやっけていくものですから非常に時間がかかる。それに常に日本のことも出てきますし、いまのことよりもっと先のことも考えると、モンゴル関係史料から日本関係史料が表裏一体とまではいかないけれども常に出てくる。

私自体がはじめから、これは細谷先生の影響なんでしょうけれども、マルチ・アーカイヴ・アプローチというものによって外交史を本当に……はっきりいって、日本史はともあれ東洋外交史といったって実際、マルチ・アーカイヴ・アプローチというものをいままで本当にやった人というのはいないんです。私の理想は、ヨーロッパ国際政治史に見られるように、ドイツやフランスやオーストリアの文書を巧みに使いながら史実の考証を広い視野で行うこと。あれを東洋においてやってみたいという野心を持っております。

実はこのモンゴル問題というのは非常に特殊な、それこそチモール問題だとかそういうのと同じだと思われるかもしれませんが、それほど閉鎖された環境でおこったことではないんです。中央ユーラシアに位置するがゆえにモンゴル問題というのは、モンゴル史研究の決定的な不幸というべきでしょうか、モンゴル語の史料だけでは絶対にいかなる時代の歴史も書けない。近代のものだったら、ロシア語、中国語、日本語、モンゴル語という4つ必ずできないと、何の論文を書いたって本当の論文は書けないという状態です。

それと同時にこの時代のモンゴルというのは、実に色々な国の人が行っています。たとえば、ヨーロッパのフィンランドやデンマーク、実はモンゴル民族学のいちばん世界で完全なコレクションを持っているのはデンマークです。なぜかという、そこからは探検隊がモンゴルへ行って同時に史料を集めたり、フィンランドの場合は、民族の起源という問題から始まりましてモンゴルに関心を持ったのです。それからシベリア出兵みたいな問題が、モンゴルに波及しまして、ポーランド人もこの辺に来ていたりしています。北欧から中東欧のどこかの国に行ったら大体、なにがしか史料は残っているんです。たとえば、1911年にモンゴルの独立を目指した使節がロシアに行くんですが、そのときいちばん助けたのはポーランド人です。ポーランドにはそのときの文書というものが残っています。そして同時に、やはりそれなりにモンゴルとお付き合いを続けているというのは、私の内にも遊牧民的な発想や行動パターンがあるんでしょう。そういうことがございまして、最近イタリアに、1911年の独立のときロシアの代表で行った人のご子孫がサンレモにいたことが分かりまして、そこまで追っかけて行ったりしました(笑)。このことは伊藤先生の『近代日本研究通信』に書きましたけれども。まあ、そういうとりとめもない旅行談をしてもしょうがないのでこの辺で止めましょう。

はっきり言って、いちばんこれまで仕事をやったのは中国でございまして、あるいは台湾も含めて外交文書を中心とした史料を見ました。いまから10年前なんですけど、試しに表を作ってみまして、清朝、中国の政府関係の文書がどういう系譜で引き継がれていった

か、かつ現在はどうなっているかという一覧表を作ってみようと思った結果、できたのがこれなんです。これは10年前のもので改訂版を作る必要がありますが、もっと詳しいのはいまできるんですが、とりあえずないもので。それなりにこの史料の系統と、そのあとどうなっていたかというものを追えば……それから逆に、いまどの辺を押さえるとどのような史料が見られるかということは分かると思います。

レジュメの3枚目に、公文書でいままで私が、ほんのちょっと見たとか、多少見学で見たというものは別として、主に見たものはあげておきました。この中で主に外交文書を中心に少し思うところを申し上げてみたいと思います。

中国の外交文書、これは日本のも基本的にそうだと思いますが、1つ基本的に押さえておかないとならないのは、「立巻」ということと、原档、鈔档という問題があります。外交文書ですから、外交事案があつて個々の文書ができる。ところが、決定的に重要なのは、ある段階で文書をまとめてファイルが作成されます。これが立巻という行為です。それをどこでやるか。それからもう1つ面白いのは、その立巻されたもとのオリジナル文書が原档ですが、中国の場合、重要案件だとこれを完全に写して同じタイトルをつけるんです。これが鈔档いわれるものなんです。

伊藤 副本ということですか。

中見 副本といいますか、何せ原文書は手書きのゴチャゴチャであつたり、電報がそのまま入っていたりします。ですから、副本であると同時に、実務をやるとき置いておけるものですね。坂野先生がなさった「四国新档」という、清末の档案なんかは、あれは原本ではなくて、いわゆる鈔档です。その案件ごとにファイルされたものを実務に携わるもののために楷書でちゃんと書き直したものです。だから、清朝中期ぐらいの極めて重要なもの——たとえば、「籌弁夷務始末」なんかも鈔档です。おそらく場合によっては、鈔档ができれば原档は破棄したかもしれない。そういうこともあり得るわけです。ですけれど、原档にはオリジナルの外国語の文書が入っているけど、鈔档の場合は、これは原則的に中国語だけであるという問題もあります。それから、袁世凱の関係する「朝鮮档」も鈔档と見ていいんじゃないでしょうか。ですから、もとの文書はあつて、立巻というプロセス——これは日本でも、文書課において何年か経過したところで何とかの一件というファイルが作成されます。ただ日本の場合は、それを倉庫というか文書庫に入れちゃえば終わりなんですけど、中国の場合には鈔档というものを作って、それを実務に使うというところはちょっと違うんですね。

大きく見ますと清朝の外務部文書の場合、ご覧いただければ分かるように清朝外務文書というのは、中国第一歴史档案馆、台北の中央研究院近代史研究所、それから台北の故宮博物院。それから、民国の外交部に関しては、中国第二歴史档案馆、中央研究院近代史研究所、南開大学、天津ですね。台湾の国立中央図書館。いまの国家図書館とかに文書があります。

大まかに言いますと、清朝外務部文書の場合は、南京の国民政府が成立して以降、国書および整理のついたもののうち、業務上必要なものがやはり南京に持っていかれたと思われる。残りが南京に持って行かれずに、北京の保管所というのがあって、そこに置いておかれました。ところが、盧溝橋事件というのは偶発事件ではなくて、その前から不穏なことは大体分かっています、それより大分前の段階から日中間の政治情勢が緊迫化するとともに、北京の保管分もどんどん上海に持っていくんです。いまでもそうですが南京は何せ田舎の町ですから、上海に置いておいて、さらに本格的に日中戦争が始まるとともに「南遷」が始まります。これは何も外交文書だけではなくて各部の文書もそうですし、故宫博物院のものとか図書館のものなんかもちこち避難していく。それが日本が敗戦のあと、今度は戻そうとするんですが、そこに内戦が始まって、一部のものは台湾に運ばれます。その辺のごちゃごちゃした経過はこの一覧表をご覧ください。

それで文書に関して見ますと、新中国が出たとき、中国科学院の歴史所第三所というのができて、これが回収工作をやるというようなストーリーがあるんです。それで、まず外務部文書に関していいますと、中国の第一档案館にあります清朝の外務部文書は原档のみで、しかも、原档がどういうふうなファイルされているかという、主にボックスに入っていて1つの案件ができています。整理というのは新中国になって、しかも、おそらく第一档案館になってからおこなわれたようです。ですから、いわゆる立巻を受けてないので、そのまま放り出されていた文書であるということが言えるんです。

はっきり申しますと、清朝時代の文書に関しては、大陸保管部には見るべきものもありますが、民国期の外交部文書に関しては、まず少なくとも……これは私の経験で全てをいう気はないですが、第二档案館保管分はやはり、台北にあるものほど価値の高いものは少ないんじゃないかと思われま。大体、基本的に重要なものは持っていった。ただし清朝時期文書に関して、それはおそらく清朝と民国の間にある程度の断絶があって、必ずしも立巻までいなくて貴重なものがほっぽりだされたというケースもあるようです。

ただ、世の中には全て例外といういろいろなことがございまして、たとえば、驚いたのは、天津の南開大学の図書館には、民国期の外交文書で、しかも、民国時代に立巻されたものが入っているんです。これはなぜかという、要するに、鄭天挺という有名な清朝史の学者が、戦前は北京の大学におられたのですが、この方は非常に文書に関する洞察力がありました。それで、あるとき南遷のいろんなものが、目茶苦茶になって売りに出たりしたことがあるんだそうです。それを彼が回収して、しかも戦後になって南開大学の教授になったときに、全部それを北京から運んできたといいます。これは主に民国時代のモンゴルとか新疆問題の外交文書なんです。それは明らかに原本です。それがいま南開大学の図書館に入ってます。そのように疎開の過程で混乱して、それがあちこちに、台北まで持って行かれなかったとか、あるいは中国科学院歴史所の第三所が回収工作をやったときにもれているものというのが結構あるようです。

外交文書ではなくても同じようなケースが、ごく最近発売になった廈門大学所蔵、末次資料でしょう。これは、海軍の軍人で末次さんという方がおられて、上海に末次機関という調査機関を作ったというんです。それは主に中国各地の新聞やいろんな情報をファイルしたもので、これが戦後になって、もちろん末次機関の資料は日本の敗戦のときに国民党によって接收されます。これは経済関係を中心とした情報だそうです。それで台湾まで運ぼうとしたら、運びきれなくて廈門で放り出したと。それが廈門大学に入って、何か随分高い値段で、去年ぐらいから出版されはじめたようです。

実はこういうケースは山ほどありまして、これまた台湾側に聞いてみますと、いや実はもっといろんなものを持ってくるはずだったけど、最後に積み残してあそこに置いてきたとか。たとえば、台湾の歴史博物館なんかは、あれは河南省博物館のものがもとになっていますけれども、実は持ってこようとしたのはもっとあったようですが、持ちきれなくてどうなっちゃったとかそういう話がたくさんあります。ですから、地方の大学なんかには意外とそういう資料があるんじゃないかと思います。

次に、第一歴史档案館の清朝外務部文書に関して見ますと、非常にユニークなのは第一档案館による史料のランク付けがありまして、目録に一級、二級と、何かお酒の銘柄のようなことが書いてあるんです。それで、価値も大体その通りです。ただしこれは、第一档案館もどこでもそうですが、全てが公開されているわけではなくて、要するに、持っていても外国人には見せないとか、対外的に開放してない文書が日中関係ではかなりあるんです。たとえばその当時、ベトナムとの関係が悪くて、ライデン大学のベトナム系の学者で貿易問題をやっていた人物なんかの場合、徹底的に妨害されて、殆ど見せてもらえないというケースもあったんです。それから日本関係でも尖閣列島の問題とか、ああいう国境問題というのは非常にナーバスですね。それから、露中関係はいまだにかなりナーバスです。そういうようなことがいえます。

保管はつねに万全とはいえません。実は台湾で、私が最初に見ていたのは1910年代の清朝末から民国初期の外交文書です。これは最初、鈔档を見ていました。というのは、はじめの頃は大学院生ですから、私の中国語文書の読解力も限られております。鈔档と原档両方があったので、鈔档を見ながら原档と対照していました。ところが、中国のほうの仕事が忙しくなって久し振りに台湾に行ってみたら、その鈔档が全部なくなってるんです。これはなぜかという、やはりそういう問題がかなりあるらしくて、いま近代史研究所は立派な建物ですが、昔はもっとちゃちな建物だったんです。みんな勝手に文書なんかを家に持って帰って仕事をしていたというんです。そのまま返らなかったものとか、それから、外交部がまた使いたいから戻すというケースもあったとのこと。いま史料検索で見られるのはあの2冊のカタログなんですけど、その前のカタログもありますから、よく注意されて調べられるといいと思います。

それから、先の立巻に関わることなんですけど、中国式綴じ方にしてあるのは、痛んでき

たりしますと、ばらしてまた綴じ直します。1つのケースですが、ある文書の中で1件ロシア語の電報が入っていたんですが、修理している過程で昔読んだそれはもう消えているんです。だから、整理をしてつぎ直したりするけれども、痛んだりなんかしたらポッと捨てたりするというのはいくらでもある。檜山幸夫さんは、あの台湾総督府の文書の整理をしながら、痛んだりするとバツバツと切り捨ててゴミのために捨てていくのをご覧になって、ハラハラのし通しだったといわれます。ですから、はっきり言って、紛失はあるし消えたりするのもある。

大陸においても北京図書館で、これはあとでお話しますが、三多(サンド)という1910年代にモンゴルに行った清朝側の役人がおり、この人が行くことによって独立問題が発生します。この人の電報原稿をまとめたファイルがあるんですが、本人が直に書いたものです。それは偶然のことから目録で見つけて見に行ったのですが、一部を残して行方不明です。これは本当のプライマリーソースなのですが、これはどこに行ったか分からない。カードには残っているんですけど、いくら探してもない。

それから、皆さま方に面白いものをお見せしようと思います。中国第一歴史档案馆のお土産といきましょうか、市場経済化にともなう文化財の商品化とでもいうべき代物です。あるとき訪問したら、実はこういうものをお土産にくれたんです。何かといいますと、第一档案馆にある文書というのは、いま公開しているのは整理されたものにしかすぎなくて、100万単位の単位でまだ未整理のものがあるようです。その中のかなりの部分というのは、清朝の末頃、移動する毎に麻袋に詰め込んで、故宮博物院のあちこちの空いた倉庫や楼閣に置いてあるというんです。それを出してきて整理をしているのですけれども、もともとそういう保存状態ですから、ぼろ切れ、ぼろくずがいっぱい出てくる。結局、そのぼろくずでどこにつなげていいか分からない断片を、コーティング加工してお土産にしているんです。おそらく世界の文書館でこういう奇妙なお土産を作っているところはまずないですね。

一般に、市場経済化で文化財の商品化というべきでしょうか、古本市場に清朝時代の文書まで売りに出ているんです。これは文書館から流れたものではなくて個人のところにあるものかもしれませんが、有名な四庫全書なんていうのもいま売りに出ているんです。

このような状況があるので、史料調査の一期一会ではございませんが、皆さまはいろいろな経験がおありでしょうけど、やはり見られるときにちゃんと見て、調査ノートを作っておかなきゃいけない。このようなはぎれがあって、どこかでつながるはずなんですけど、そんなことはやらずにバツバツと捨てているという状態なので、これは国柄の違いというか、おおらかと言うべきか、そういうことがあります。

それからもう1つ、狭い意味の外交文書——つまり、外務省文書以外にも当然、外交史料は存在します。中国は大騒乱が起こったところですから、外交文書というものの自体、そう完全に残ってはいない。だけど、たとえば、宮中档、あるいは軍機処档、内閣、大總統府档、そういうところにもいわゆる外交関係案件が残っていて、外交類という項目で分

類されておりますから、常にあらゆる可能性を見てみればいいと思います。外務省からの電報は、ひとかたまりになって内閣にあげていたり、大総統府にあげていくというシステムは完備しておりますので、狭い外務省文書というものに限らずに外交史料は追っていったほうがいいと思われます。それはやはり中国においても日本でも、外交というスタイルは新しくできたものであるからだと思うんです。

それから次のところに行きますと、日中関係史料はテーマによりけりで、至るところで出会います。たとえば、先ほどの一覧表にあるように、私はあまり国内機関の文書というのを見ておりません。ところが、たまたまある論文を見たら、民政部の中はかなりモンゴル関係のものがあるということで、結果的に民政部文書は全部見ることになったんです。その中に川嶋浪速関係文書がありました。これは何かといいますと、清朝末期に肅親王の紹介で川嶋浪速が北京に警務学堂という警察学校を作るんですが、そのときの契約文書から何から全部残っていて、一部はすでに雑誌で紹介されましたけど、本当はもっとあります。それを見ますと、たとえば、川嶋浪速はなぜ最終的にクビになったかという極めて単純な理由でございまして、要するに、警察学校のいわば外国人顧問をやっておりますので、いつも出掛けるときは横にお巡りさんがいて、昔のことで馬車を利用しますが、馬車の運転手もお巡りさんなんです。ところが、それで東交民巷の日本公使館に入っちゃったんです。そういうことをやられたら困ると、中国の外務省は怒り出したということが、最終的に川嶋が首になるきっかけであったことが分かりました。

民政部というのは警察と諜報もやっております。ごく数年前、日本の天皇が中国を訪問して話題となりましたが、日本の皇族の中国体験としては、日中戦争のとき東久邇宮が、あれは確か南京陥落のとき親閲式に行ったわけですけども、それから竹田宮は関東軍の将校として中国東北に駐在していたかと思います。日本の皇族の正式訪問というのは、天皇の訪問が最初じゃないんですね。光緒帝のいた時代に伏見宮が行っております。その伏見宮が北京に着いて以降、ずっと民政部がどこを訪問して何をやったと全部秘密につけてるんです。たとえば、その当時の高官の家に行ったら、何時何分に訪問して、名刺を置いていってどうしたとか、何時から日本公使館のパーティーがあって誰それが来たとか、そういう記録も残っているんです。それやらこれやらございますので、日中関係に関しては、それぞれのテーマで追われてみられるといいと思います。

私も、たとえば、内藤湖南が奉天で、そこにある清朝の史料を探そうとして大トラブルをおこして、そこに日本総領事館も介入したりするという件は、論文で紹介したことがございます。

それから地方文書、個人文書、外国機関文書に関しましては、主に私の関係から言いますと、内蒙古档案馆、遼寧省档案馆、黒竜江省档案馆、吉林省档案馆というところで仕事をしたことがございますが、地方の文書館というのは公開性という点では基本的にまだまだ、北京の第一档案馆や南京の第二档案馆から比べると非常に問題が多いと言え

ます。内蒙古档案馆なんかは割とオープンですけど、黒竜江省档案馆なんていうのは、いま本当に開いているかどうか……。経済的に地方の文書館は危機にあり、笑い話に、そのうち彼らは文書を売るんじゃないかと。何か建物を殆ど商社みたいなのに貸しているというようなこともあるんです。ですから、たとえば、遼寧省档案馆は逆に攻勢に出てまして、日本といろんな関係を作ってやっけて、かなりマイクロ化したりしていますけど、これは場所によりけりで、所詮、地方の档案馆は各省の管轄にあります。ですから、非常にオープンなところと閉鎖的なところがあるといえます。

それから、これは笑い話の1つで、こういう本をご存じですか。題名もおどろおどろしい、川島芳子の人も驚く秘文という本なのですが、これはご覧になった方はございますか。1994年の6月に香港で出た本です。その年の8月、たまたま香港に行ったときに本屋で見えて、何だろうこれかと思って。しかし、よくよく見ますと、何と川島芳子が北京の裁判にかけられたときの関係原文書のファクシミリ版です。のみならず、刑場に連れて行かれるときの川島芳子の写真まで載っています。しかし、その解説というのは人を食ったような内容で、どこから持ってきたとも何とも書いてなくて、お坊さんである編者が人生の無情にどうのこうのという極めてくだらないことを書いてある。このように由来も何も書いていないけれど、どう見ましても原文書のファクシミリで、それはそれなりに面白いです。日本語の文書も入っています。そう思っていたのが1994年ですが、96年に私はアメリカに出張してまして、スタンフォード大学からニューヨークに移りまして、ある日、日本料理店へ昼御飯に入ったら、新聞があったので読んでみたのです。そしたら、それは読売新聞でしたが、共同通信の配信で、北京市档案馆から川島芳子に関する文書資料を入手したという記事を目にしました。実はもとはこれなんです。要するに、それで初めてこれは北京市档案馆から出たものだと分かったんです。ところが、おそらく北京市档案馆は、香港に流したのと同じように、こういう珍しいものがあるよといって共同通信に流して、多少のご利益を得たのではないかと思います。既に公表されていると共同通信は調べず、そういう画期的な資料が出たという記事を配信したようです。それからあと帰ってみたら、また朝日にも少し後記事が出たけれども、朝日は、これはかつて香港で出版されたことがあるようだ、ちょっと書いてありました。おそらく共同通信の配信を受けた段階で朝日はチェックしたか、あるいは誰かに聞いたか。ただ、このタイトルだけだったら普通の人を買うような内容のものじゃないですね(笑)。ロシアはもっとひどいですけども、文書の公開やアクセスやモラルという意味でかなり問題があります。地方の档案馆では、こういう文書があるから買わないか、マイクロで買わないかとか、また日本がつられたりと。まあ、ソ連ほどひどくはありませんが、そういう問題がございます。

それから個人文書に関しては、私が実際のところ見たのは、この趙爾巽という、東三省総督をやった人物の文書。これは第一档案馆にあるもので、この由来を見ますと、もともと山東省档案馆にありました。おそらく晩年に隠棲した場所が山東省で、天津だと思うんで

すが、それが 1963 年になって第一歴史档案馆に入っていったものなんです。いまのところ私が見た個人文書というのは、趙爾巽文書だけなんですけれども、たとえば、これは前、伊藤先生のご紹介で、『日本歴史』の葉書通信というところでふれた福島安正と趙爾巽の会見録というのがちゃんと残っております。この趙爾巽文書の中にはかなり日本関係の史料が含まれています。いろいろ現物を持ってこようと思ったんですが、これはたまたま家にありましたので、どうぞ。ただ、これもコピーを作らせるときは結構うるさくて、向こうとしては趙爾巽の日本関係のは何となくちょっと、まあいいやと行ってやらせてくれました。しかし、これはもういまは問題ないと思います。

日記は、たとえば最近、日本大使をやっていた蔣作賓とか、顔惠慶、鄭孝胥、金毓■などのものが出ています。これは私、初めて知ったんですが、蔣作賓という人物は、例の満洲事変のときの日本駐在中華民国大使を務めておりましたが、ところが、なんと満洲事変のそのときには満洲にいたんです。というのは、北京から休暇が終わり東京に戻ろうと思って、奉天か何かに行ったところで、まさにその事件に遭遇したということで、慌てて東京に戻る顛末が出てくるんです。それから、鄭孝胥の日記は、これはかなり昔からあることは知られていましたけど、中国の歴史博物館にありました。

金毓■はごく最近出たもので、これはおそらく名前さえご存じないと思いますけれども、いわゆる文人肌の役人で、中国東北の歴史文献などの編纂をした人物で、満洲国の教育長をやるんです。日本との関係も深く、東大の東洋文化研究所の前身でもある東方文化学院に客員で来るのですが、そこで結局、日本と絶縁をして、ひそかに上海に逃れて、上海で日本の満洲における侵略というのを告発する。この方は戦後、歴史研究所の幹部になりまして、まさに清朝や民国史料の回収に活躍するという人で、非常に克明な日記を残しています。実はこの人の手によって、いわゆる中国東北地区、日本の満洲史に対して中国東北史というフレームができてくるんですが、そういう人の日記なんか、これはかなり面白いものです。そういう日記も大陸でもある程度発表されてはおりますし、将来性はかなりあると思われます。

しかし、現所有者が模様眺めといいますか、たとえば、鄭孝胥などは、死んだあと何らかの形でしかるべき機関に入ったものが混乱の中で回収されたということがあるようですが、いろいろと話を聞くと、まだ遺族のところにあると思われます。我々にとって面白い国民党、あるいは日本に投降した人間の資料なんていうのはやはり、まだ依然として中国の政治状況ではオープンにできない。遺族にとってやはり漢奸っていうのは大きな問題で、ただこれは将来的には改善されるかもしれませんが、やはり重要なもので出てないものがあります。

前に私が大学院で教えていた学生が中国からの留学生で、有名人物の親族でしたが、その人物の日記は、上海の銀行に預けていたら、その銀行が倒産したり混乱でどこかへいっちゃったとか、そういうような話をいろいろ教えてくれたことがありました。もっとあるはず

なんですけど、まだいま出てきているのは一部で、顔惠慶などは新中国になってから新中国にいわば残った人ですから、いまの新中国にとっては決して悪くないわけです。だから、そういうことで出てきているということがあると思います。

むしろこの点では台湾のほうが積極的で、それは台湾の政治・経済状況が反映していると思われま。いちばん典型的な例は、蒋介石の夫人で宋美齡の前の奥さんの日記だか、自伝というのが2、3年前に出ましたでしょう。あれはおそらく、アメリカからしかるべく持ってきたと思います。つまり、国民党政府の台湾化という中で歴史評価が混乱してくるわけです。そういう中では史料が出てくるチャンスがあるんでしょう。蒋介石の前の奥さんの日記が出てくるというのは、これは一種の国民党旧派に対する攻撃であるわけなんです。そういう中で出てくることもある。

それから、はっきり言って非常にお金もあるということで、中央研究院の近代史研究所は、そういう資料が見つかったら高額な報奨金を出すということです。

だけれどもこれは、はっきり言いまして、台湾所在資料では最重要分は依然として明らかではありません。例の『蒋介石秘録』の場合、当時の国民党当局が資料を産経新聞の古屋記者に提供したということですが、あれは向こう側が選択して、こういうのがありますといって書かせたわけ。おそらく蒋介石のあの性格を考えますと、克明な日記を残しているだろうし、何応欽にせよ張群にせよ、彼らのもとには重要な史料があると思うんです。ところが、それはやっぱりまだ出ていません。やはりこれも台湾の政治状況との関連で、この先どういう形でどう出るか分かりません。ただ、おそらく日中関係という意味では、20年代以降、30年代、その辺の蒋介石および幕僚たちの残したもの、それから戦時下の文書、そういう文書を押さえているのは国民党の旧体制派ですから、その連中が制限をしていると思うんです。けれど、これは日中関係史という意味では、かなり期待できるのではないかということはいえます。そういう意味では、まだ個人文書や日記というのは、やっと手に入りつつある段階といえましよう。

それから、図書館の所蔵の文書にもご注意いただきたい。私のいままでの経験では、中国科学院図書館、南開大学図書館、北京図書館の分館あたりはかなり面白いものがございます。ちなみに、この科学院の図書館とは、自然科学専門の図書館かと思いきや、実はそうではなくて、これは戦前の日本の東方文化事業会の後身です。初めは科学院一本で、それが文革のあと、科学院と社会科学院に分かれたのです。ですから、社会科学院ができるまでの全部の総合図書館がここなんです。たとえば、大連にあった満鉄の貴重な学術書、科学レポート類は全部こちらに運んでおります。それは満鉄関係文献資料目録として、東方書店からマイクロになってます。ここには変な日本軍人の手紙みたいなものもあるらしいです。これは意外と狙い目です。

南開大学は前述したように北京から持ってきた奇妙なものがあり、北京図書館には、これは新しい大きな北京図書館ではなくて、昔の北京図書館の方ですが、あそこは民国期

の本、しかも、いわゆる貴重本以外は全部置いてあるんです。ここには非常に珍しいものがあります。これなんかも狙い目です。

とりわけそういう中で、文書との話で函稿・電稿というものについてお話したいんです。先ほど北京図書館……もちろん分館ですが、三多という清朝末期のモンゴルにいた清朝側の最高責任者の電報資料があつて、それがなくなってしまったということを申しましたが、そういうものがあつたり、有名な電稿・函稿では、李鴻章訳署函稿というのがあります。李鴻章のオフィスから発信された文書をまとめたものです。清朝時代はそもそも電稿函稿と印刷されている原稿用紙がオフィスには備えていた。三多のものから見ても分かるんですが、結局、発信するほうは全部自分たちの手元で控えを残しておくのが当たり前なんです。清朝の高官というものは、自分では起案をしない。李鴻章の対外案件は馬建忠。有名な人物で、坂野先生が研究されましたが彼が処理しています。これは今でも当たり前で、たとえば、細川総理の場合は成田憲彦さんですか、あの人がおそらく文書というものは、全てじゃないにせよ、あるいは他の総理秘書官と一緒にやりながら書いて、それを重要案件だと細川さんが手を入れるということで、これはどこの国だってそうなんです。最高責任者や、あるいは官僚のトップの大臣が全部の文書を自分で書くということはないんです。しかし大きな違いは、細川さんが熊本県知事時代から自分の名前を出した発信原稿を全て自分のファイルとして保存しているかといったら、そんなことはないわけです。たとえば、田中義一にせよ、寺内正毅にせよ、文書はありますけど、自分のところにきた貴重な手紙、それから出したもののちょっとした控え、重要案件の多少のファイルなんかは残すことがあるとしても、自分の名前を出した電報なり書翰、文書を、初めからそういう便箋があつて、控えを作って自分のところで手元保存として残すという形式は日本にはないんです。

つまり、清朝時代においては、ある大官僚がいたら、官僚のところに1つのファイルがあると同時に、その出したところのセクションのファイルの中にも同じものがあるという二重のことになるんです。なぜこういうことがあるかという、それは清朝時代の前近代的な幕僚政治システムのためで、高官がいるとすればその下に文章を書く幕僚というものがいて、それが高官が出世して動く度に全部くっついていくわけです。その幕僚のもとには高官の名前を出した文書のファイルがずっとある。そういうものがあるがゆえに、たとえば、李鴻章でも曾国藩でも、彼らが死んで間もなく膨大な数の文集が出るわけです。日本ではそんなものはないですね。日本ではいくら田中義一が死んだって、せいぜい田中義一伝記というのできるぐらいで、田中義一執筆文書、重要文書集なんていうのは有り得ない。ところが、中国の前近代的な幕僚政治システムのもとでは、最大の官僚の要件というのはいくらも文章が書けることです。文章による統治なのです。

そうだとすれば、この前近代的な幕僚政治システムというものが終わることによって、手元に電稿や函稿などというものが残されると言う習慣も消えるはずなんです。つまり、近代的な

官僚であれば、官僚がそのポストにいるとき起案し、その文書は文書館に入ればそれで終わりのはずなんです。どうもそのあとを見ていくと、ずっと続いているようなんです。つまり、中国における文書自体の作成方式、ないしは幕僚政治的なものというのは、依然としてそのあとにも残っているのではないか。この辺りは、もっと文書が開いてみなきゃ分からないわけなんです。

ちなみに、この電稿・函稿というものは、原則として中国では文献として分類されて図書館で保存されております。あまり档案馆のほうに行かれても見ることはいけません。

伊藤 文書ではないんですか。

中見 文書ではない、本だという解釈なんですね。だから、これはむしろ図書館へということになっています。

伊藤 つまり、印刷されているわけではなくて……

中見 印刷ではありません。手書きです。もちろんそれが文書館の中に入っていたりする場合もあるわけです。ただし、電稿・函稿ですから、電報1つ1つがゴチャゴチャというんじゃないなくて、組織的に写されていなければいけないわけで、原稿用箋に何日発信と順番に記録されています。

ちなみに大物クラス、たとえば、李鴻章、左宗棠、曾国藩、それから民国ぐらいの人のものも最近、ぞくぞくと中国で全集が出つつあります。これはやはりそういうものがあつたからで、ただ彼らは、たとえば、李鴻章に関して見れば、死んで間もなく出た全集と今度の全集とは違って、もっといろんなものを集めてあります。文書館の史料も入っています。たとえば、李鴻章全集の場合、去年、戴逸さんという中国史学会会長の清朝史、近代史の大家が来て、日本にも結構、李鴻章の手紙があるのに感心されていました。それで例の、いま亜細亜大学にいる彼と連絡するよにということで、在華日本人顧問の資料集を書いた……

伊藤 李廷江。

中見 李廷江さん辺りは随分、いろいろとそれを探されているからと。そしたら、分かりましたということでしたけれども、かつての李鴻章全集よりもっといろんなものを集めるとのことです。山口県の文書館に連れて行って田中義一文書なんかをお見せしました。そしたら、中国人の手紙が随分あるというので喜んでいらっやって、こういうのも入れたいとおっしゃってたんです。ただ、新しい全集は相当膨大なものになるようで、一体どこまで新資料を集められるかが鍵であると。いわゆる大物政治家の全集は大体、いま清朝の末期ぐらいから始まって、だんだん民国になっていくと。もちろん孫文全集なんていうのはその前から出てますけれども。どこまで資料が発掘できるかがやはり鍵ではないでしょうか。

この会に相応しいものとしては、回想録、オーラルヒストリーにふれますと、中国大陸では文史資料、台湾では伝記文学というものに関して、これは基本的にここでおやりになるようなオーラルヒストリーとは全然性格が違いまして、いわゆる稗史・野史の類だと思えます。ちなみに内蒙古に関しては、これは政治協商会議の中の文史委員会が集めていて、

いままでにどれだけヒアリングなり書かせたかという、そういう目録というのを調べたことがあるんです。それを追っていきますと、内蒙古文史資料も 40 数冊出ていますが、文革前に、これは各省全てそうだと思いますが、集めた分はもう出尽くしたと思われます。これからはだんだん新しく、つまり、新中国期から文革あたりというのに移って行って、前みたいな清朝時代のものとか、それから、辛亥革命、国民党時代の記事は少なくなるでしょう。もちろん新たに採録したものがありますけど、何せもうかなり時代も経ってきましたので。

関連することを言いますと、いずれにせよここが決定的に違うところでありまして、回想録にせよ、オーラルヒストリーなんかに関しても、本人が書いたりなんかしているものを必ず出版する前には文章整理ということをするんです。たとえば、他に資料があったら、これは違うじゃないかと切ったり直したりするんです。だから、この中国における回想録や何かというのは、悪くいえば改竄されたものになっているものが多いと思われまので、この点にご注意ください。

それから、外国機関に関する文書で私が知る限りのものを言いますと、中東鉄道——これは満洲国が中東鉄道を接收したとき文書も合わせて入手して、満鉄が一部整理をして目録を出しておりますが、大体それを完全に引き継いでおります。それから、この満鉄の問題に関してはあとで申し上げたい。

それから、満洲中央銀行、横浜正金銀行、日本大・公使館などの文書について、総じて中国側は慎重であるということが言えましょう。なぜかといいますと、文書の内容が殆ど日本語で書かれており、あるいは、ロシア系機関のものだったらロシア語で書かれてたりするわけなんですけど、具体的に言いますと、まず内容を把握してどういうものかと確認します。そして、目録ができる。それまで、そして、目録ができるまでは公開ができないと。これは何も外国機関だけの問題ではない。全ての文書整理がそうなんです。

それからもう1つは、これらの文書を接收した経過というのが、必ずしも一様ではないこと。中国側が非常に警戒している節は、外国側から返還要求が出てきたらどうするかという、それに対する警戒なんです。たとえば、日本の満鉄なんかの資料に関しても、また返せと言ってくるんじゃないかと思っている節がどうもあるようです。ただ、そういうケースもありまして、50 年代にドイツの中国にありました大使館・公使館文書というのが、東ドイツへ返されケースがあるんです。そういう外国機関から、それぞれを押収したときの経過と、外国からの返還要求に対する警戒というのがあるとされます。

それから、レジュメの日本への変な期待と一部日本人の行動というのは、これはなかなか言いづらい問題なんですけど、どうも日本人の学者の中に、日本のこういう方面の史料に飛びつく人がいっぱいいるらしくて、またそういうのを日本人に見せると日本人は必ず食らいつくと思っている傾向が多いようです。中国側は、これは金になるとまでは言いませんけれども、何かそういうふうになっているところがあると。

さらに文書の公開は資料の公開という意味ではなくて、プラス・マイナスの意味で、財産

権を巡る紛争へとつながる可能性があるというんです。これは皆さん方はよくお分かりでしょうけど、档案馆というのは別に史料館ではなくて文書館なんですね。公文書館なんです。民法の整備となぜ関連があるかといいますと、遼寧省档案馆に行きますと面白い掲示が出ています。いままでこの遼寧省档案馆が提供した文書が、どういうことに役立ったかという、これは実に面白い話なんですね。昔の満洲国の中国人官僚で東京の大使館の参事官をやっておられた方がいて、お金持ちで東京にご子息用に家を買っていたようです。それが戦後ゴチャゴチャになっていたのが、遺族が日本の東京地方裁判所にその土地の確認申請を行ったと。そのとき、その土地の所有権に関する文書が、奉天省の何かのファイルの中にあって、遼寧省档案馆から提供することによって勝訴したというんです。

それからもう1つ変わった例としては、4、5年前のバブルの時代に、北京空港で日本人の不動産屋が捕まったという事件があるんです。なぜかというと、多額の日本紙幣を持っていた。それは何かというと、満洲国の官僚で結構、東京に土地を持っていた人がいるらしくて、その遺族を捜し出して、バブルのときだから都心の住宅地の所有権を買い取ろうとした変な不動産屋が北京空港で捕まったという、笑い話のようなケースがあるんです。ですから、文書館にある日本絡みのような文書というのは財産権の問題。と同時に、いま中国は民法をかなり整備して、かつての財産権の確認もやっているという問題があるんです。だから、文書館にある文書っていうのは、歴史の資料というよりも、現実にそういう財産権ともつながることがあると言えます。

もっと極端なケースは、黒竜江省档案馆にもとハルビン在住のユダヤ人関係者が何人か来まして、あの土地は私たちが持っていたから返せと言い出したっていうんです。それで黒竜江省档案馆は、外人とりわけユダヤ人なんかに見せるとたいへんなことになるって警戒して、実は今年の夏がハルビンの町が成立して100年記念なんです。それで、ロシア、日本、アメリカの3カ国で共同の国際シンポジウムをやろうとしていたのですが、それも中止になったといわれています。実はこういうことがあって(笑)、変に外人を入れるとややこしくなるという、そういうこともあるらしいです。

先ほどの何か日本に対する奇妙な期待という、あるいは一部日本人の行動ということに関して言いますと、最近、中国で出された日本関係資料の目録としては、瀋陽の遼寧省档案馆の満鉄資料、これは出版物の目録。それから、長春にある吉林省社会科学院の満鉄資料館の目録。あるいは最近、天津の日本租界にあった日本の公共図書館の図書目録といずれも出ていますが、万博記念財団から全部、しかも、日本の大使館や総領事館の紹介で出版助成されています。この瀋陽と長春に関しては、あのときの瀋陽の総領事が非常にそういうことに熱心な方だったもので、それで出したんですが、向こう側が編纂してますので、ちょっと編纂の仕方にいろいろ問題があるんです。こういう作業に日本人の学者が上手く参加してやればいいんですが、この目録なんかはどうも、結果的に日本側からかなりのお金を出したけれども市場に出回らなくて、非常に高い値段で日本の本屋に

売り込みが来ているというようなことがあるんです。海外にある日本関係の資料なんかも、しかるべく日本側の参加者も得て、もっとオープンな形でやればいいんですが、どうも向こうサイドの思惑でやっていて、編纂のやり方がおかしかったり、初歩的なミスが目立つ。この3つに関して共通していえるものです。

ちなみに瀋陽の目録なんかは、結局、日本側から出版費は出しているわけですが、向こう側は売っていいんです。そしたら随分勝手な値段をつけて、しかも、日本人はこれを見たら喜ぶだろうと思っている節がどうも多いようであります。

次にロシアのことに関してごく簡単に言いますが、ロシアの文書館というのは非常に多いんですが、私が見たのは、ロシアの外務省のアルヒーフ。外務省といってもロシア帝国時代の外務省の文書館。それから、ロシア帝国の閣僚会議、つまり、日露戦争後に初めて閣僚会議という閣議ができて、この文書はサンクト・ペテルブルグにある文書館で保管されております。それからもう1つは非常に奇妙なものなんですが(笑)、アメリカのスタンフォード大学のフーヴァー研究所のアーカイヴズには、ロシア帝国の在日武官府の文書というのが残っているんです。それも見たことがあります。その最後のは別としまして、とにかくものすごい量です。外務省の中国課が、モンゴル、満洲を所轄しておりましたが、その中のモンゴル問題に関するファイルだけでも、毎月5、600 ページの量に及びます。関係あるところを読むのですが、こちらのロシア語の実力もあるわけなんですけれども、非常にくたくたです。

ちなみに欧米——特にアメリカの学界は、非常にロシアのアーカイヴの文書に対して関心を持って交流をしております、到底日本は太刀打ちできないぐらいです。ちなみに、スタンフォード大学のフーヴァー研究所は、フーヴァーにある史料とロシア側の文書を交換する協定を結びました。しかしこれは、ちょうどフーヴァーにいたときにその展覧会なんかもやっていたんですが、フーヴァーが期待しているほど成果を上げないで打ち切りとなったようです。ただ、ピッツバーグ大学は積極的にやってまして、まずお金を出して目録を作らせるんです。それをロシア側とアメリカ側で出版し、さらにマイクロ化して売っていくということをやっております。

ロシアに関して日本の機関はどこもやっていないわけではなくて、実は今年の秋、私はロシアに行くんですが、東洋文庫は、サンクト・ペテルブルグにあります東洋学研究所の中央アジアから出土した仏典とか、満洲語、モンゴル語の古文書をマイクロ化して入手するという計画でやっております。それこそ政策研究院でも何かそういう文書館とやるということは可能ですし、アメリカ側はそれをどんどんやっています。とりわけコミンテルン、外務省、それからポリティビューロー、政治局の文書なんかをやってます。

それから、こと整理・目録化も一日の長ありといえますか、そもそも(笑)、いわゆるいまの中国やモンゴルの文書学の体系を作ったのはソビエトなのですが、目録作成はシステムティックにやっております。目録といいましても具体的にいいますと、スポラポーチニクと

オーピシと2つありまして、オーピシというのはいわゆる目録で、スプラポーチニクというのは解題書に近いもので、いまの中国の各档案馆では簡明指南なんていうのが出てますでしょう。あれはいわゆるスプラポーチニクなんです。それに対して、文書館が実際にサービスのために出すのはオーピシ。大体、簡明指南シリーズなんていうのは、中国側の独自の発案というよりは、もともとロシアでそういうやり方をとっているということを実似たのです。ロシアに関してはやはり、キャリアがありますから。

その次の、これは私の個人的な問題でもあるわけですが、ロシア側の文書を研究していていちばん困るのは、ロシア帝国の文書の背景を成す官僚制度、政策決定機構の知識・研究が弱いし、研究の基礎となるべき文書学、ちょうど日本の近代の文書を読むときに、どう読むかとか、あるいはどういう書式であるかとか、そういう裏付けがあってはじめてよく利用できるわけですが、やはり日本人一般にそういうのは弱いので、これを本格的にやっっていこうとなると、かなり難しいのが実情ではないかと考えます。

それから、ロシアに関しては地方の文書館にも注意が必要で、たとえば、これは私は見ただけなんですけど、ハルビンから接収してきた文書というのが、ハバロフスクの文書館にあります。それから、ウラジヴォストークの文書館には、ウラジヴォストークにありました横浜正金銀行とか、そのほかの機関の資料というものも含まれていますし、それから、ウラジヴォオストーク市の経済統計とかそういうものがありまして、これは日本関係のものも非常にあります。

文書館というものをロシア語ではアルヒーフというわけですが、日本でいう文書館以上にもっと多様なもので、たとえば、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の Санкт・ペテルブルグのアルヒーフといいますと、ロシアの有名な東洋学者のノートとか手紙とか、そういうものも含むようなものなんです。いたるところにそういうアルヒーフがありまして、たとえば、写真アルヒーフというものがあったり、映像アルヒーフがあって、数年前に出版された日本の関東軍や満洲国に関する写真集というのは、ロシアの映像アルヒーフから出たものです。決して文書だけではなくてアルヒーフというのはもっと多様な史料を収蔵する施設としてロシアでは発達している。

図書館に関しても、私の知る限りでは、モスクワにあります極東研究所には、ハルビン学院から持ってきたり、満鉄の北満経済調査所から没収してきた本などもあります。ただ、満鉄の大連本社などから持ってきた資料は、どうもシベリアのどこかの町にあるという未確認情報はあるんですが。

ついでながら、先ほど言いました駐在武官府の文書の件ですが、これは面白くて、どういふものかというのと、要するに、日本に駐在していた武官が、ロシア帝国が崩壊したあとアメリカに亡命するときに、その文書を全部持っていったんです。かなりの部分はロシア帝国が第一次大戦下の日本で発注した武器の契約書とか発注書類で、次から次へ見てもそれが膨大で、大体そんなものを見る人もめったにいないようでしたけれども。それから、ロ

シアへ発送するときの保険の問題。それとともに、ときどき日本の軍人と定期的に会談をおこなうんですが、その会談録。田中義一もそういう中に出てきます。

ちなみに、非ボルシェヴィキというか、そういう文書や文献がかなり海外に散在しております、そういう史料を非常に効果的に使ったのは、ジョン・ステファンの『Russian Fascists in Asia』などですが、まあ、かなり残っております。最後の駐日ロシア大使マレスキー・マレヴィチが極秘文書をアメリカに持っていったというのは確かなんですが、アメリカに行ったときかなりそれを期待して探しましたが、駄目でした。モンゴルにいたロシア外交代表の文書の一部はやっとならイタリアで見つけたんですけども。まだまだそういうわけで、ロシア帝国時代や、そのあとのいわゆるシベリア内戦のときの文書なんかは、逆にアメリカやヨーロッパに残っているケースも多い。もちろん中国にも一部、ハルビンにあった図書館の資料がいま吉林大学にあつたりしますけれども、そういうものも射程距離に日本史の方は入れられるといいと思います。

最後はちょっと、せっかくオーラルヒストリーをここではおやりになっているから、全然いままで申したこととは脈絡のない話ですが、オーラルヒストリー外国編をやられるなら、実はソ連は穴場なんです。一番私が知っているのは戦後、日ソ交渉に関与したチフビンスキーという外交官で、ロンドンで松本さんと交渉した方。いまだに極めて元気です。私もお宅まで呼ばれて行きました。というのは、その方は昔から中国近代史で有名な学者なんです。それで、日本編の回想録を作ったから日本で出版できないかというような話まで出てきたんです。いわゆる共産党体制の中のアカデミー会員ですから立派なお宅にお住まいでした。まさに東洋学者の書齋みたいなどころでお話したんです。

そしたら面白いのは、旧ソ連における東アジア担当外交官の特異性というのは、大概レニングラード大学の東洋語学部か、そのあとはモスクワの外交学院を出た人なんですね。ソビエトでは学界と外交官には殆ど区別がなくて、ソビエトのアジア研究者というのは、同時に殆ど外交官としてのキャリアをつんでいて、両者の間で移動があるんです。そういう連中であると。それで、日本派と中国派というと、圧倒的に中国派が優秀なんです。ただ、それ以上に強いのは欧米派だと。その内幕話をチフビンスキー先生は教えてくれたりしたんです。同じことは他の方からも伺いましたが、興味深いエピソードとして、決定的に日本にとって不幸だったのは、グロムイコが存在だということです。フェドレンコという日本大使をつとめた人物で、中国文学の研究者としても著名な方がいたのですが、グロムイコは彼が大嫌いで、最大のライバルだったそうです。グロムイコもヤルタ会談のときの通訳をやったし、フェドレンコは毛沢東の会見のときの通訳だった。グロムイコは意識的にフェドレンコを嫌がっているらしく、なぜか徹底的にグロムイコというのは、東洋とりわけ中国に対しては猜疑心の固まりだったし、日本に対しては軽蔑的であったということです。どうもそれは外務省における人脈の問題もあるんだと。チフビンスキー氏からは色々面白い話を伺いましたが、随分写真なんかも出てきまして、いっぱい持っているんです。田中孝彦さんですか。彼辺

りに1度オーラルヒストリーのためロシアに行ってもらえばいいし。というのは、かつての特権階級というのは引っ繰り返ったわけで、そういうときは割とオープンに口を開くものです。

だけどもはっきり言って、いくらチフビンスキーといたって、もっとも機微に渡ることは絶対言わないと思うんです。いくら老いたりとはいえ、共産党員であるがゆえに。だけど、それを周辺から逆に押さえることはできるわけでしょう。この件に関してはいつ頃からできてきたかとか。実は彼の自伝の原稿を見せていただいたら、これは当たり障りのないような話ばかりなもので、そうではなくて日本で仮に出版するとすれば、いろいろと補足修正が必要だろうといいましたところ、彼は書き換えるし、さらに日本側の質問に答えるかと言ったら、それはもちろんやりますというようなことを言っていました。

オーラルヒストリーも、チフビンスキーもそうですし、フェドレンコもまだ生きている。フェドレンコはルーマニア人の女性中国研究者と一緒にあって、アカデミーと喧嘩したとかそういう話を聞かされましたけれども、まだ60年代前の主だった日本外交をやった外交官が生きてますね。それから、もとGPUみたいな感じの人たちは、産経新聞や何かがいろいろやっているようだけれども。

それから、どうもロシアの文書館は、中国以上に日本の政党、マスコミはては怪しげな団体までもが入り込んでいるようです。私はよく知りませんが、共産党とソビエトとの問題の文書資料集はよくはできているんですけど、どこから持ってきたかというファイルの番号も書いてない。それは和田春樹先生が指摘されています。それから、共同だか時事通信の記者がクレムリンの何とかという本を出しています。あれも随分強引なやり方で勝手にというか、アシスタントを使って文書館から探し出してやっているという、そういう一過性的な話題作りの仕事はやっていても、きちっと文書を体系的に押さえてということはどこもやっていない。しかもロシア側は、いろいろな日本のマスコミに対して、こういうものがあるから買わないかというようなオファーをするという、非常に憂うべき現象があるようであります。私は大体、帝政ロシア期を対象としておりますので、そういうのとは全く関係なくて、帝政ロシアの外務省の文書館なんていうのは、日本人に会ったことは全然ないようなところですから(笑)、非常に学問に集中できますが。

どうもそういう傾向はいま中国でも起こってますし、ソビエトは前から起こって、またややこしくなってくる。そういう変な動きをすることによって真面目な学者の動きが妨害される。中国における外国機関の文書の問題もそうで、遼寧省の文書館なんかは、日本人は満鉄や何かの資料には関心があるから、何かつまらない文書を高いマイクロフィルムにして売ろうとしたりしていますが。ついでながらあそこの満鉄文書というのは、どうも満鉄本社の文書ではなくて、鉄道総局の文書と解釈するべきじゃないかというのが、井村哲郎さんの意見なんです。ただ、私が見た限りでは、ニューヨーク出張所長から満鉄総裁宛の文書というのも入ってましたが、私はあまり満鉄関係のものは興味もないもので見てませんけれども、この辺りはちゃんと確定していただきたいと思いますね。

それから、この横浜正金のことは聞かれたことございますか。

伊藤 いや、全然聞いたことはないです。

中見 横浜正金の北京支店の文書は、確かに中国側が接收して、文書集が出てますでしょう。『横浜正金在華活動資料』。その中身は非常に面白くて、新四国借款団の史料とか、それから、これはおそらく日本の横浜正金を引き継ぐ東京三菱銀行の資料室に行けばあるんでしょうけど、ラモントと井上準之助の会談録の原本というのは日本に残っているんですか。それが出てくるんですよ。北京支店に回付された複本ですが、それから、肅親王が横浜正金から借款を受けるんですが、そのときの原議書もこの中に出てきます。このような史料があることはあるんですけども、これまた一体どこにあるかとはっきり書いてありません。実は前、大・公使館文書では1度変なことに巻き込まれて、私は日本の外務省に対して非常に不愉快な印象を持っているんですけども、こういうのも然るべきところがちゃんと筋を通して、ちゃんと相手方の立場を考えながら、何も日本側が返せだ何だというのではなくて、むしろちゃんと見せてもらいたいし、向こう側が変な間違いをしないようにという、そういうルール作りをやればいいんですけども、相手方は、返してくれと言ってくるのではないとか、それから接收されたときの問題があります。それと同時に、日本から少し金が稼げるんじゃないかという、せこいことも考えているようで、それで何かゴチャゴチャになっているところがありまして、こういうのはちゃんとしたルールを作ってやってほしい。

最後に、ドイツに関して私が見たのは、ドイツ外務省の政務局とドイツ在華大・公使館の文書。それぞれボンとポツダムにございます。ボンの外務省文書室は、ドイツ外務省の中にありまして、これはたまたま、例の満蒙独立運動のときに変なドイツ人が……北京公使館の武官が、バブジャップを利用して中東鉄道を爆破させようとし、逆に捕まって殺されるという事件があるのですが、その関係の資料を見に行こうというので行ったんです。ちなみにドイツの東アジア関係文書の所在を一番知っているのは、パンツァーというボン大学の教授でしょう。今井さんのお弟子さんなのかな。熱心に彼はいま文書のことを調べておりまして、彼からかなり聞いたこともございますが、ドイツはもっと日本以上に戦後処理というものはたいへんだったようで、ドイツの政府機関、ないしは党の文書でも、敗戦の時点でどこに疎開されていて、どの国が接收したかが重要なポイントで、そのパンツァー先生は、先ほどの私のこういう一覧表のドイツ編を作っているんですね。そしたら 10 何カ所に渡っていると。

ちなみに、外務省というのは非常に意識的に、政務局の文書、いちばん中枢部局ですが、戦況が大体もう駄目になってきたときに、日本と違うのは、焼き捨てようとは考えないんです。もちろんいちばん危険性のあるのは焼き捨てるんでしょうけれども、どうせ押収されるのならばアメリカ、イギリスの手にとりて疎開させたという形跡が、ありありとあるんです。結果的にこれが 10 数カ所になって、それが今まで東ドイツ、西ドイツに分かれていたのですが今度の統一になって、これをいかにして集中化しようかという問題があるようです。そ

れでたまたま私は、そのさっき言った奇妙な問題を追いつつ外務省に行ったら、外務省のアーカイヴズの方から、ドイツの在華大使館文書は東ドイツが隠していたが、最近公開されたから見に行けばいいと言われて、ベルリンにそのあと行く予定だったので、それでポツダムに行ったんです。ちなみに、ドイツ外務省の文書室というのは、外国人の場合、大使館の紹介状がない限り見られないという関係があつて、急いで日本大使館に電話したらすぐ書いてくれたんですけども、この連邦文書館のはそういう問題はありません。それで、ドイツ在華大使館というのは、第1次大戦後に復活して以降から1944年の敗戦までの文書なんですね。戦後50年代に東ドイツ政府にソ連経由で中華人民共和国政府から返されたものだそうです。この中には例のトラウトマン工作とか、ノモンハン事件に関するものとか。ドイツにあった中国大使館というのは、かなり立場として面白いんです。そういうものもある。目録は全部マイクロに撮ってきましたので。

ただ、どの時点でどこが押収してどうなったかというのはよく分からなくて、つまり、ドイツの敗戦は日本の敗戦前ですから、汪兆銘政権下に大使館はあるわけですね。日本軍がその時点で押さえたのか、そのあとに国民党が押さえたのか。国民党が押さえたのを、さらに共産党が押さえたのは確かですけど、それまでどうなっていたかがもう1つ分からないんですね。ただドイツ側では、ローランド・フェルバーという有名な中国史研究者はこの文書に関してよく知ってました。50年代になって正式な外交資産の返還というので、ほぼ完全に戻ってきたと。だから、中国にあったドイツ大使館は、文書は殆ど焼かずに接收に応じたんだと。ただ、接收に応じたといっても、ドイツが負けたと知った瞬間に日本軍が行って押さえたのか、日本軍はもう手をつけずにいて、そのあと中国軍がやったのかどうなのか、ちょっとその辺がよく分からない。

ただ、これは日中関係の中のドイツ大使館の役割から見ると、非常に面白いものが丹念に見れば出てくる可能性はあるし、たとえば、モンゴル人民共和国の成立した後にもドイツ人は結構行っているんです。そういう関係の諜報記録なんかも出てきますし、ゾルゲなんかも日本に来る前にはあそこにいたわけですからね。本当に関心のある方はぜひ、ポツダムにありますのでご覧になるとよろしいかと思います。

ちなみに、そこは日本史で行かれたという方は聞かれたことがありますか。

伊藤 いやあ……

中見 僕が行った時点で中国人は2、3人来てました。非常に熱心ですね。だから、これなんかも最近、ナチスと日本の関係を研究されている、田嶋さんなどは、おそらくご覧になっているんでしょうけれども、日本史の方たちで調べられる方がおられるとよろしいと思うんです。

最後に、これはもう付け足しでございます。日本史研究者に期待していることとして、今回まさにこのご案内をいただいて目的を拝見したら、海外に存在する日本近代史関係の体系的調査、目録・データベース化というようなことをお考えで、これはぜひやっていただ

きたいと思うし、ちなみに東大の史料編纂所は幕末開国期のものなんかはずっと調査をやってますけど、この時代には及んでおりません。国文学資料館は海外所在の日本古典籍をかなり精力的に調査されていて、国際日本研究センターは在外日本文化財の立派な目録を最近作られています。東大東洋文化研究所は、鈴木敬先生の海外にある中国絵画の目録事業をされ、最近、民博がアイヌ関係資料の追跡をされていると伺っております。鈴木敬先生なんかは、いわゆる美術史におけるカタログ・レゾネといえますか、作家毎の完全目録というのを意図したような感じでやられています。これはぜひ近代史関係でも是非やっていただきたい。日本近代の関係資料が、どういうところにどういうものがあって、どう保管されているか。このさまざまなデータベース化事業の中でもいちばんおそらく画期的なのは、東大東洋文化の中国絵画のプロジェクトで、あれで主だった絵画を押さえたから、あの目録に載るか載らないかで絵の値段が違ってくるというくらいなもので、しかも、中国側がそれを真似た形で、中国国内の中国絵画のデータベース化とカタログ・レゾネを作り出したというようなことがあります。こちらが仮にそういう大規模な形で日本関係のものをやれば、連鎖反应的にどんどん史料が出てくるんじゃないかというような気がいたします。国際日本研究センターの在外日本文化財なんかは、随分つまらないものまでも入っていますが。

ただ、1つぜひお願いしたいのは、日本語の史料のみに目を奪われずに、外国語による日本関係史料も視野に入れてやっていただきたいと思います。ちょっとくだらないことを書きましたが、非日本史研究者から見た日本史研究者への違和感。日本語の史料だけが史料ではないと。遼寧省の档案馆は結構、満鉄だ何だという方が来ているんですけど、つまらないものでも満鉄や日本語の史料はいいと思っているんです。だけど、あそこにあるいちばんいいものは何かというと、奉天政府の文書なんです。つまらない満鉄の2級の史料を何だかんだとって大事にするぐらいならばむしろ、奉天省政府の文書を見ればいいと思うのですが、満鉄の研究者というと、満鉄の史料であれば何でもいいような感じできずと見ているという、どうも我々、非日本史研究者から見ると、非常に違和感を感じざるを得ません。

あとは全く付け足しで、日本関係史としては、近現代史資料センター、アーカイヴズの必要性で、言うまでもなく、最近でもイギリス、それからロシア側でも中国でも、第一档案馆だけでもマイクロとして出版されているものを全部買ったら、6、7000万円になります。そういう形で大量に販売されています。ロシアのポリティビューローのものも出ているし、コミンテルンのものも出てるし、イギリスは前から大量に出してきて、在外大使館か何かの資料もごく最近出しましたね。ああいうものを集中的に収める施設というのがないわけで、しかも、イギリスの資料にせよ、ロシアのコミンテルンにしたって、それはイギリス史、ロシア史の枠内だけに止まらない。そういうものをどこかに収める施設。たとえば、イギリスの外交文書なんかは、かなり東大が買われましたが、もう東大だけで収めるというような問題ではないし、か

といって同じようなものをあちこちで買う必要もないと思うんです。

それから、写真やオーラルヒストリー……まあ、オーラルヒストリーは皆さん方は専門家であらして、ただ写真は、数年前、朝日新聞にそれぞれのご家庭にある写真の珍しいものを紹介する企画があったでしょう。その中に随分、東南アジアやら中国に関するものもありましたが、あのとき掲載された写真が、そのあとどこにいくか分からない。そういうものを一体どこが収めるのでしょうか。

それから黒木親慶文書は、これは有馬先生もおやりですが、何も日本だけに限る史料ではなくて、かなりロシア語の面白い文書が入っている。いちばん悲劇的というか、それもまたしょうがないんですが、林出賢次郎の場合は、外務省は満洲皇帝との会見録の部分もらい、それ以外の一部分は国会の憲政に入った。ところが、林出は若い頃ウルムチにいたんです。その関係やら、世界紅卍字会に関する資料というのはお宅にあるというんでしょう。つまり結果的にしろ、林出という個人の文書を完全にどこか1つに収めるわけではなくて、それはそういうものを収めるような場所がないわけなんです。国会図書館はそのような気がないし、外務省はもっと気がないということなんです。だから、林出さんのところには若い頃にウルムチで収集した史料があって、それは日本で使っている方もいるんです。それは依然として和歌山のお宅にある。

それから変わったところでは、この王育徳資料というのがわたくしの研究所が関係してまして、王育徳さんという方は台湾独立運動の運動家で、亡くなったあと紆余曲折があって、うちの研究所が蔵書をご寄付いただいたんです。その中には、王さんがやっていた独立運動のパンフレットとかそういうものがあるんです。だから、これなんか図書館は嫌がるんですよ。胡散臭いものだというし、汚らしいと。しょうがないから、教官のほうで暫時預かっておくと。だけどこれなんか、いわゆる台湾独立運動というのが、将来においてちゃんと総括がなされる時、内部で発行したパンフレットや何とかというのは資料として必要であると。

さて、明石康文書に安住の地はあるかというのは、これも全く余計なんですけど、たとえば、明石康さんが亡くなった場合はどうか。いわば日本政治経済に関わる人物なら憲政資料室が引き取ってくれるでしょう。しかし、日本という範囲を逸脱したような人物がいて、そのかたが亡くなると、それこそスタンフォードのフーヴァーじゃないですけど、近現代史の日本を核としたものでいいですけども、ちゃんとしたアーカイヴズというものがあればそこに個人資料は収まるでしょうし、その中には、たとえば日本人が海外で撮った写真とか、そういうものも入れてもいいんじゃないか。これはぜひ、日本史をやっている方は、単に日本のものばかりと考えずにもう少し、しかも、現実に日本人の行動というのは、日本という枠組みを突き崩すほど大きくなっている。たとえば、緒方貞子さんの文書なんかはどうするかとか。明石文書の場合、かなりの部分はカンボジア和平とボスニア・ヘルツェゴビナ問題だと思うんですね。まあ、明石さんがそういう文書を残すようなタイプの人かどうかは別として。だけどそういうものをもっと、日本人も国際化すると共にその行動も広がっている

わけだから、それに応じた形での近現代という時期の史料を総括し、保管するちゃんとした施設が必要じゃないかと。そういうことにもぜひ、先生方に目を向けていただきたい。

最後に、私も随分、日本史の方から教えていただいたんですが、もっと日本史と非日本史の交流や情報交換の必要性。大体、日本史と外国史研究がボーダレス化しつつあると思います。中世の村井章介さんですか。いわゆる日本史と朝鮮史とのリンケージというのがあるわけで、全く日本史の人間と非日本史の人間が全然別の方角から見ている、同じことをやっていたりすることもあるので、もう少しこういう点を何らかの形で改善していただければと思います。

どうもつまらない話を延々として申し訳ございません。

伊藤 いえいえ、どうもありがとうございました。まあ、いちばん最後のほうは耳の痛い話がいっぱいありましたけど、私が考えていることは大体そういうことなんですが、これは本当に道遠しという感じでございまして、その1つはアメリカに行ったときに感じたんですが、ナショナル・アーカイヴズで史料を見ていて、日本の公文書館の古いところは非常にきちんとしているんですが、だんだん…だんだん時代が下ってきたら、文書の質がどんどん落ちていくということが歴然としていて、整理も悪いし保存状態も悪いと。戦後になって再建されたかという、それはない。

私、実はこの間、自治省に史料を見に行きまして、自治省というのはもともと内務省の地方局を継承しているわけですがけれども、内務省の資料を各課が引き継いでいるわけです。それで、古いものはかなり公文書館に渡しているんですけれども、必ずしも全部渡しているわけではなくて持っているものもあって、その原簿を見せてもらいましたら、これが実に何が何やらめちゃくちゃな文書で、1つ1つの文書に誤字があるというふうな目録でして、それが将来どうするつもりなのか文書課の人に聞いてもさっぱり分からないという状態で、そもそも文書そのものについての観念というのが、明治時代はある程度はあると思うんですが、現在は特にない。ましてや文書公開ということが最近言われて、お役人たちに聞いてみますと、要するに、文書公開というのは文書を作らないことだと、こういうことを言っているわけでありまして、課題はちょっと大きすぎるなというふうに、いま思っているわけです。

そういう日本の文書も、それから外国の文書もご覧になっていて、文章というものについては随分、考え方が違うというふうなお考えをお持ちかどうかということもちょっとお聞きしたいし、それから個人文書の中で、たとえば、朝鮮の関係の人に聞きますと、朝鮮の人は危ないから日記を書かないとよく言っているんですけれども、中国の場合に、たとえば、前に周佛海の日記をやりましたけれども、周佛海をはじめ、汪兆銘もあるという話ですし、蒋介石もちろんあるんでしょうし、だから、そういう日記を書くという習慣といえますか、それはやっぱり中国の中では伝統としてあるのかなあということもちょっと思ったんですが、その辺はどうなんでしょうかね。

中見 中国では、日記を書くというのはごく普通なんでしょうね。

それから、先ほどの文書に関する感覚の違いですね。それはおそらくありますでしょうね。たとえば、1つの例としてあげた電稿・函稿というようなもののあり方ですね。これは、いわゆる日本の近代日本における官僚のあり方と、官僚政治と清朝の幕僚政治、それを引き継ぐ国民党ぐらいでも違う。だから、文書だけ見ましてもかなり性格によって違うし、たとえば、モンゴルでは文書の形態自体が、清朝の統治下に入ってそれまでのものとはガラッと変わって、人民革命になってまた変わるということもありますし、おそらく日本のお役人さんの文書だって……まあ、日本の場合、異民族による直接統治を受けた経験がないから違いますでしょうけれども、おそらく沖縄県なんかはすごく変わるんでしょうね。そういうものは、いわばインスティテューションというか、制度とともに統治のあり方によって文書の書き方も変わる。だから、朝鮮総督府なんかは文書のマニュアルを作ってるでしょう。おそらく公文書学みたいなものは、そういうものも含めてやるべきものなんでしょうね。

逆に言いますと、ここにもちょっと書いておきましたけれども、ロシア側の文書で、これは私が能力がないこともあるんでしょうけれども、非常に日本側にとって難しいのは、そうは言うけど中国の資料に関してはやはり、日本の東洋史学の伝統で文書を読むということ自体は、漢文や何かでトレーニングは受けているんです。ところが、ロシア式の文書は、極端に言いますと、日本でも極秘機密なんかかっていう書き方もロシア語は随分違うんですね。そういうものをどういうふうに判別するかどうかとか、その組織の書き方とか、こういう表現のときはどういう意味合いを使うとか、そういうものっていうのは、少なくともまだ日本のロシア史研究では確立してないんです。もちろんいまの外務省のロシア担当官なんかはある程度、見よう見まねでロシア側の文書の書き方……ロシアとのやり取りがあるときに、ロシア語で必ずしもやるわけではないんですけれども、文書としてはね。だから、ある種の国の習慣によって文書が成立する背景というのも違うんじゃないかなという気がいたしますね。

伊藤 僕は、日本人の文書の感覚というのは、戦争に負けたときに燃したでしょう。それに非常に端的に出ていると思うんです。たとえば、ドイツやイタリアの場合を聞くと、日本大使館にいたアタッシュへの報告なんかもイタリアやドイツにかなりたくさん残っているというんですね。日本はそういうものが残っているかという、どこにも残ってないんですよ。

中見 まさに仰る通りで、南京にあったドイツ大使館のは殆ど無傷で引き継いだというのは、あっぱれというか、堂々と負けるんでしょうね。

伊藤 まあ、負けた経験がないからということはあるんでしょうけどね。

中見 日本人のは姑息で、在北京中国大公使館文書は、そもそも大東亜省ができるときに指令がきてどうするかということになって、貴重なものはその時点で焼いているわけでしょう。だから、いま中国に残っている日本大使館、公使館の文書というのは、2級の資料が主です。焼くのももう面倒臭いというようなものばかりになるというようなことがあるんです。一方ドイツはもう負けそうだとすると、疎開するときも外務省の文書はなるべくアメリカ軍が

来る方向に置いておこうとしたと。

ちなみに、これは聞かれたことがないですか。日本にあったナチスドイツの大使館文書というのはどうなったんですか。あれはいまドイツにないんですよ。これは僕は聞いたんですが、中国大使館のは戦後戻ったけど、日本のは全然ない。逆にドイツにありました日本大使館の文書というのはある程度残っているんですか。

伊藤 いやいや、聞いたことがないですよ。

中見 これはおそらく、ナチス系の外交官は戦争犯罪追求を恐れていたし、まだ日本と連合国は依然交戦中ですからね。だから、一定の時間があつたのです。ドイツの有名な文学者で戦時下の日本大使館にいた方の回想録が最近出ましたでしょう。あれにはそんなことは書いてませんけどね。投降して終戦のときはいるわけだけど、その時間差の中で、おそらく最後の大使が全部焼いたんだと思うんです。

台北にある中華民国の外交部の文書の中には、中華民国のイギリスやベルギーの公使館の文書もあるんです。日本の外務省には必ずしも各地にあつた大使館の文書というのは、往復のはもちろんありますけど、大使館文書はそのまま持ってきたというのはいませんね。

伊藤 それはないですよ。つまり、そういうつもりもないんじゃないですか。

中見 ないんですね。ところが、ロシアだと完全に、アジア局の文書と同時に北京公使館の文書、日本大使館の文書も残されているんですよ。

伊藤 それはやっぱり、日本の外務省なら外務省の史料についての基本的な考え方の問題だと思うんですけどね。あそこは積極的に収集しているという話は聞いたことがない。いまあるものをなるべく見せないようにという(笑)、そういう話だけで。

中見さんの場合は、中国語、モンゴル語、ロシア語はかなり自由にお読めになると。もちろん英語やドイツ語やフランス語もそうなんでしょうけれども、そういう能力を最初から持っていないとちょっと難しいですね。だから、そういう人たちの協力を得るシステムを作る以外にないですね。

中見 一方でもっと外国語の史料もご覧くださいと言いながらですけども、中国にあるものでは満鉄の文書が実際そうですし、それから横浜正金のもおそらく、中国語訳と書いてありますから原文は日本語でしょうね。それが中途半端に変に中国語という論理表現の違う言語に訳されて資料として使うのであれば、これ惜しいと思うんです。もう少し上手く日本人も使って、それこそ金を出してほしいと言えば出して構わないんですよ。だけど、ちゃんとその整理の段階からもう少し参加させてもらう。どうも何かちょっと奇妙なんですね。逆に飛びつく日本には高く買われるというふうですね。

もう1つにはこういう問題がありまして、日本に来ている日本史を研究している中国人研究者というのは、多くはもともと日本語を勉強してきた人で、歴史を勉強してきたわけではないんです。そうすると、たとえば、辛亥革命でも、日本外交文書の記述を非常に高く評

価して、それを翻訳したりなんかするんですね。ところが、中国にも同時にもっと面白いものがあるので、なぜそちらのほうに、もう少し精力を割いて研究してくださらないのか。

伊藤 まあ、それはそうなんですけどね。だけど、日本に留学して歴史の勉強をした人は、今度は逆に、向こうへ帰って档案馆に行くと、妙に嫌がられて見せてもらえない。なかなか中国の档案馆は難しいというのが大体、こっちに来た人が帰って言うことですね。中見さんなんかは随分いろいろご覧になっているようですが、むしろ中国人のほうが難しい。

有馬 さっき言われていた瀋陽の遼寧省档案馆のは、例の遼寧省档案馆の所蔵の一部資料目録という、あれですか。

中見 はい、あの2冊のやつですね。九大にはいったでしょう。

有馬 あれは中国書店か何かを持ち込んできて……

中見 非常に高価で買われたんでしょう。

有馬 7、8万ぐらいだったんじゃないですか。

中見 あれは万博協会から編集に 300 万助成が出たんです。日本総領事館を通じて 200 部か何かは日本の機関に寄付をするという条件なんです。残りは自由にやってくださいというので、それこそ東方書店だ何だにものすごい高い値段で売ろうとしたようです。ただ、もうあの目録に入ったものは自由に見せてくれますが、あれには満鉄の文書は入っていないんです。

伊藤 出版物ですか。

中見 ええ。それで、もう1つの吉林省社会科学院の満鉄資料館というのは、解学詩さんを中心に、吉林省社会科学院のルートを使って、長春にあったいろんな機関から集めた資料をひとまとめにしたものなんです。要するに、もとはどういうことかという、吉林省社会科学院と、遼寧省档案馆と、遼寧省の社会科学院が、それぞれ満鉄センターを作りたいと言い出して、それで日本の国際交流基金のほうも困っちゃって、最初の段階としてまずそういう資料目録を出したらどうかというようなことになったというんですね。

一方、いろいろと新しい発見もございまして、ちょっとこの話もしましたけれども、大連にある日本の憲兵隊だか警察の文書というのがあって、それが終戦のとき生焼けになったまま地中に埋められて、それが発掘されて出たんです。それをマイクロフィルムに撮って、ネガとポジを逆転するという、ちょうど防衛庁でも最近そういうのがありましたが、それと全く同じことなんで、それを見ましたけどね。大連市の档案馆にありますよ。

あれは原剛先生でしたか、防衛庁のほうの……彼が『日本歴史』に書かれた文章を拝見して、いやあ、どこの国でも似たような話があるなと思いました。

伊藤 あれは最初の処置が良かったので、何とかかなりの部分が生き残るような感じですけどね。

この汪兆銘政府档案というのは、これは中国科学院歴史研究所第三所ですか……

中見 ええ。いま第二歴史档案馆にあります。

伊藤 これはそういう意味ですか。

中見 ええ。第三所で回収した資料は、結局清朝関係は現在の第一档案館、民国期のものは第二档案館に分配したんです。これは見ました。いまの南京第二档案館にあります。

ちなみに、東京にあった汪兆銘政府の大使館の文書の一部は東洋文庫にございます。

伊藤 東洋文庫ですか。

中見 ええ。先生のお弟子さんの何とかさんも、ご覧になっています。

伊藤 ああ、劉傑……

中見 劉傑さん。それは古本屋に出たんです。ただ、日本に居住する華僑の何とかとか、そんな大した文書ではありません。

伊藤 古本屋も案外、馬鹿にできないんでね。フーヴァー研究所のイーストアーションコレクションに行ったときに、中支那派遣軍の降伏文書、引渡、引継ぎ文書というのを、実に立派に製本されたものが、机がいくつで、その1つの机は足が壊れているとか、そこまで細かく書いて、もちろんそれは武器から始まって建物から何から書き上げたやつなんですけどね。それをあそこで持っているんですね。これはどこから持って来たんだと聞いたら、東京の古本屋で買ったんだと言っていました。

中見 そのフーヴァーが面白くて、あそこには篠田治策のがございまして、シベリア出兵関係史料を、原暉之さんにお知らせしたら「すごい」と言うんです。フーヴァーの何か……スタンフォードのOBの方が東京に来て収集していたらしいですね。そのあと、例の有名な政治学の方が引き継いでやったと。

ただ、それとは全く逆のケースもあるんですよ。台湾で、台湾総督府が崩壊したときの引継ぎの、机が幾つかとかそういうのを書いた文書が台湾の古本屋に出て、三田祐次さんという方が買われたんです。台湾文書の収集家の三田さんってご存じじゃないですか。丸紅の部長さんなんですが。

伊藤 結構、古本屋や何かに出ることはあるんですね。

さっき林出さんのことで国会図書館の名前が出ましたけど、いま国会図書館は、憲政資料室もあまり積極性がなくなっちゃったので、本当はあそこを拡大してセンターにして行こうというふうには思ったんですけど駄目だから、やっぱりセンターを作ろうということをいま考えて、その準備としてこういうことをやっているんですけれども。

中見 お作りになられるときは、せつくなさるなら近現代史という中身で幅広いものにされたほうが。

伊藤 ええ、それはそうだと思います。

中見 憲政資料室というのは、憲政とやったところにそもそも……

伊藤 あれは憲政にあまりこだわらないでやっていたから、軍人さんのものや何かも随分集めたんですけどね。

中見 まあ、しかるべき方がいなくなっちゃったら、そういうものだと思いますしね。

伊藤 あれは要するに、ライブラリアンをグルグル…グルグル回しているわけですから、憲政資料室に3年いないんです。初めて来て、ああいう草書体の文書などを見てみんなびっくり仰天して、それで少し慣れたところですぐ転出ということですから、腰が落ち着かないわけですよ。

中見 川勝平太氏の問題で最近有名になった英国議会の資料なんかでも、近現代史資料センターみたいなのがあったら本来そういうところが持つべきでしょう。地域センターが保管するとのことですが、ちょっと趣旨が違うんですよね。あれを改組をするならいざ知らず。イギリスの外交文書についても、一部は東大、東洋文庫にあり、横浜市の開港記念館が一部買ったり、ところが、あれは1カ所でどこかで買おうとしても無理だし。

伊藤 要するに、センターを作ってネットワークでやる以外ないんです。もういろんなところが持ってますしね。

中見 ええ。それでやればいいけど、ただ、お役人さんの発想というのはそういうのとは違って、一時話のあったアジア資料センターですか。あれも箱物を作って中身を集めると。いまさら東洋文庫もあり東洋文化もあるところに本やなんか集めたってしようがないし、むしろデータセンターを作って、マイクロフィルムや何かで文書を集めたら。ただ、文書を集めるのは中国から拒否されたでしょう。あれはどうなるんですか。少しは動き出すんですか。

伊藤 頓挫しているんじゃないですか。最近、全然話を聞かないし。報告書というか調査、あれは出ましたけど、読んでみたけれども大体みんなに知られているようなことばかりで、特にどうということもないもので。

これからちょっと情報を集積して、この科研は昨年度と今年度でやったんですけども、もういっぺん出してみようということでいま考えているわけですが、実はこのところいろいろ史料を集めはじめて、矢部さんの文書をこの前 10 数箱運びこんで、きょう 30 箱ぐらい運びこんで、そういうのをどんどん運びこんでいるんです。それで、いま現に作られている文書もどんどん…どんどん入れているものですから、その整理が追いつくんだろうかというのが、いまちょっと心配なんですけども。

矢部さんなんかでも、あれは目録を一応、憲政記念館が少しは作ったんですけども、聞いたら50箱ばかりあるうちの数箱分しか作ってないんですね。あそこに重光の文書があって目録があるんですけど、やはり全体のごく一部の目録なんですね。我々としてはなるべく目録を集めようとしていて、目録の数だけでいうと500点ぐらい集めたのかな。けども、とてもじゃないがまだ全然足りないんですね。

伊藤 ただ、僕も随分あちこちのホームページを見てみましたが、史料を持っているところは、こういう史料がありますというだけで、それ以上の情報というのは殆どないですね。

中見 先ほどおっしゃったような、閉鎖的サークルということでは、内閣档案のうち台湾の

歴史語言研究所にいったのがあるんです。もとは南京にあったのが。これが台湾の景気が良かったときは、聯合報という新聞社がスポンサーになって、ものすごい立派なのを300冊ぐらい出したんです。ところが、そこで資金が尽きたので結局、それ以降の分はいわゆるスキャナーリーディングで原文を読み込んで、積文をつけて。将来的には完全にデータベースを公開するけど、いまのところは中央研究院の中のインターネットで公開しています。ピッツバーグ大学を出られた中国史の方だけれども、コンピュータに非常に強い方が指揮をとられてやっています。だから、中央研究院内ではもう完全に公開されているんです。

伊藤 つい先週、鹿児島で図書館長の会議がありまして、それに行き、黎明館という資料館に行ったんですけれども、それでいろいろ目録をもらいまして、これを我がほうのインターネットに載せてもよろしいかと言いましたら、それはちょっと困りますという話で内情をいろいろ話してくれたんですが、実はその目録は各方面に配布してあり、あそこの館に行けばその館のコンピュータで検索ができるけれども、それを外に出すということに対しては非常に抵抗があって、ついに実現できていない。だから、もし上のほうがオーケーといったらすぐ出せるような状態になっているという話で、同じことじゃないかといったんですけれどもね。要するに、目録は出しているでしょう(笑)。

中見 こちらから逆に伺いたいんですが、日本にある横浜正金の資料というのは、あれはどの程度見られるんですか。

伊藤 いまは見られないんじゃないですか。

櫻井 横浜市史がマイクロフィルム化して持っているっていう話ですけど。

伊藤 市史のほうですか。

中見 そうですか。

伊藤 何の編纂のときだったかな……横浜正金のロンドン支店長をやっていた、あとで千葉の知事になった人……

中見 加納。

伊藤 加納久朗さん。あの人は木戸さん宛に、本店に送った情報の一部コピーを送ったのがあったんですね。あれを見ますと、商況や何かについてかなり詳しく書いているんですが、その他に政治状況とかそういうこともかなり詳しく報告しているんですね。ああいうものは商社・銀行は全部やっていたと思うんですが、三井文庫もおそらくそういうのを大量に持っているんじゃないかと思いますが、いま僕は三井文庫の評議員をやっているんで、だんだんに近づいてみようかなと思ってますが、あそこも最近、新しいものを出すというふうな気風になってきたんですが、新しいところといっても明治以降というぐらいですからね。

中見 ときどき茫漠たる気分になるんですよ。たとえば、このロシアに行ったときは12月の真冬で、粉雪が舞って3時から暗いんですよ。何で俺はこんなところでやらなきゃいけないのかなと。しかも、日本にも結構いい資料があるんですよ。バブジャップのことをやってい

ますが最初に本拠地に行ったのは日本の満鉄で、それがなんと公文書館の中のファイルに出てくるんです。それは恐らく誰も見たことがないと思います。

それから、外務省史料館や防衛庁にも珍しい史料があります。横浜正金にもあるでしょう。おそらく横浜正金の文書があったら、借款をやるときは全てデータを付けるわけで借款の原議書というのがあるはずなんです。そういうものを持っているはずですよ。その北京に置いておいた写しが北京支店の接収文書の中にあって、それは活字化されています。だから、もっと日本にある史料も見なければ。そういう意味では、何で日本人がわざわざ外国に行ってちょこまか動いてやらなきゃならないのかと思いつつながら(笑)。だから、意外と日本にある史料のことを日本の外国史研究者は知らないということがありますね。

伊藤 結局、外務省は、日ソ関係は史料の公開を憚っているうちに、アメリカがどんどん公開して。

中見 しかも韓国に至っては、日本政府からあんなに公開したと行って抗議をうけたっていうんでしょう。どうしようもないですね(笑)。

でも、そういうので最近ごく私の近辺に出現した例で、江夏由樹さんという一橋大学の経済学部の教授をやっている私の昔からの友人がおります。奉天に榊原農場というのがあって、ここは利権の巣窟なんです。たまたま私が遼寧省档案馆の奉天省政府の文書を見ていたら、榊原農場関係のファイルを見つけたんです。名前は知っていたんです。それを江夏君に言ったら、昔からそれに関心をお持ちでご覧になった。それで、『アジア経済』に非常にいい論文をお書きになられた。最近、大塚健洋氏の『大川周明』を読んでいたら、この榊原というのはたいへんな人物なんですね。のみならず、バブジャップまで出てくるんです。どういうことかという、経済を巡る利権関係と、それに相乗して変な日本的キリスト教の何とかの会というのがあって、そこに川嶋浪速もくっついてくるんですね。

伊藤 最近、満蒙関係で面白いなと思って、というのは、児玉秀雄の文書を最近手に入れて、いま整理をしているところなんですけれども、整理をしている女性たちが張作霖の手紙が結構あると言うので、それで、第2次奉直戦争の時期の史料がある程度あったんですね。それを材料にしてこの間ちょっとお喋りをしたんですけれども、やっぱり僕は外国史の勉強が足らんもんですから、たいへん不十分な話になっちゃったんですが、でも『日本外交文書』を見たら一応、清浦内閣の末期に、外務大臣松井、それから総理大臣清浦、それから陸軍大臣宇垣と了解をとって、それで会見をして、いざという場合には日本が武器を供与すると。そのかわり、張作霖が日本の希望も入れろと。こういうことで覚書を作っているんですね。そのことについては、外交文書で公開されたやつにはその片鱗もないわけです。それで、あらあらと思つていまもういっぺん見直しているところなんです。

中見 なかなか奉天政府というのは難しく、文書の回収という意味では、奉天省政府の文書は完全に回収できたんです。つまり、日本側が突然、武力発動をして、あっという間に全部押さえて、それを日記整理処に移したのです。いまそれが遼寧省档案馆にありま

すけど。ただし、いちばんトップの政治というのは所詮、張作霖の幕僚政治なんですね。その文書がどうなったか。

伊藤 張作霖の文書ですね。

中見 ええ。ただ、どの程度まで回収できたかということがあるし、どうかなということがいえませんね。だから、むしろその1つ下のランクの行政的なものはほぼ把握できる。何か中途半端に満鉄の史料だけにとらわれて、奉天がどうのこうのと書くよりも、遼寧省政府の、奉天省政府の文書を確実に見たほうがいるんなものが出てくる。その榊原農場なんていうのは、まさにそれで出てきたわけなんですね。その土地転がしには、向こうの大官と日本人が絡んだ利権の構造があるので、さらにそれに日本の特殊な右翼団体や何かも絡まって利権の巢窟になっているという構造が出てくるわけです。上手く使うとそういうのが出てくるんですけども。

伊藤 児玉家なんていうのはどうして出てきたかという、児玉家はだんだん…だんだん人が絶えて、最後に女の人が1人残って、私が死んだらどうしましょうかという相談を木戸さんの息子の弁護士にして、木戸さんは僕にすぐ取りに行けという話で、それで取りに行ったんですけどね。いろんなルートで、いま樺山資紀と愛輔の資料の整理をやっているんですが、これなんかは、文春の人にこういうことやっているんだから情報があつたら知らせてよねと言っていたら、知らせてくれたんですよ。ああいうのをやっている、まだまだ明治・大正期の資料はあるんですね。樺山さんのところなんか、「どこに置いてありますか」と聞いたら、「いやあ、田舎のほうの蔵の中に入っている」という話で、「冬は駄目よ。ちょうど季節のいいときに持ってきてあげるから」という話なんですね。

中見 樺山愛輔のお嬢さんは白洲正子さんですよ。

伊藤 そうですね。

中見 白洲次郎さんののは、白洲メモぐらいしかないんですか。彼に関しては、何か最近、話題をよんでいますけど。

伊藤 あるんじゃないですか。誰も追っかけてないというだけのことで。やっぱり研究者の関心が最近すごく弱くなっているというか。

中見 そういふことがあるんですか。むしろ先生方のグループが非常に熱心なので、どんどん出てきているのかなと思ったんですが。

伊藤 新しい史料はあまり出てきてないですよ。ある史料で勝負しようという人のほうが圧倒的に多いわけだから。

中見 さっきのお話に戻るんですが、例のフーヴァーのも、あれはフーヴァーが異例なんで、一昨年、半年の間新しい産業開発の何とかという奇妙な文部省のスカラシップをもらって行って、あちこちのアメリカの図書館を回りましたが、日本関係の文書資料を戦後ある程度関心を集めるようなセンスがあったのは、フーヴァーは例外であまりないでしょう。中国のものはそれこそかなり所蔵しているし、あそこに例の荒木貞夫の日記、あれも一部

ですが。それから、篠田治策文書を李朝実録の編纂という関心から見ていたら、シベリア出兵に関する資料が出てくるし、いろんな満蒙問題の資料も出てきて、東北アジア地域史研究会の通信に書いたんですけども。アメリカのハーヴァード・エンチン図書館にごく一部あるんです。それは鴨緑江森林開発の資料で、古本屋から買ったものとか。アメリカの大学にあるアーカイヴセクションで、日本人の文書を持っているところはまずないんですね。中国人関係史料はあるけれども。

伊藤 アメリカに亡命したりした人が少ないからだと思いますけどね。篠田さんのだって、どうやってあそこに入ったのかということは、あそこのアーキビストの人に聞きましたけど分からないんですね。

中見 私も同じ関心から聞いてみたら、益子さんにしたところでだいぶ後で入られた方です。スタンフォードのOBの何とかっていう方が戦後尽力して、かなり古本屋から入手され、共産党関係資料とか荒木もその何点かだったと。篠田文書に関して言うと、篠田家は別に経済的にも困っていたみたいでもないようですね。戦後もかなり立派なお宅にお住まいであったようで。だから、あれが全部かどうかはまったく分かりません。

伊藤 あれは全部じゃないだろうと僕は思いますけどね。

中見 フーヴァーは李朝実録の最後の部分を持っていますが、それをフーヴァーに売ったのは篠田さんです。あれは日本に2セットしかなくて。僕ははじめ李王家から出たのかと思ったら、そうではなくて篠田さんだということです。もう1つ米国にある日本から戦後流出した重要なコレクションは、バークレーの三井文庫でしょう。それは文書ではありませんが。三井文庫をバークレーが入手するプロセスに関して、シューマンという人がマスター論文を書いていて、面白いですよ。

伊藤 いろいろやらなきゃならないことが山積してまして(笑)、どうしていいか分からないという……いま『佐藤日記』でまだ追われているでしょう。それで、それが終わらないうちに何かそろそろ『鳩山日記』のゲラが出てきたんで(笑)、日々これ追われて。

どうも本当に長いことありがとうございました。他に質問がなければ終わりにいたします。
(第8回終了)